生徒会少年リリカル劉ぅ！只今、青春をお楽しみ中

山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生徒会少年リリカル劉ぅ！只今、青春をお楽しみ中

【Ｎコード】
Ｎ９６５２Ｎ

【作者名】
山田

【あらすじ】
俺は、生徒会長。現在生徒会人数、一人　　趣味は昼練する部活連中を見ながらのティータイム。サイコーすぐるｗｗｗｗ　　そんな俺にある一本の電話が来た
『巻きますか？巻きませんか？』
もちろん巻きますと答えた。・・・・・ごめんなさい冗談です。　　親友から『ヘルプミ～』と言われた。今思えばこの『ヘルプミ～』に答えなきゃよかった・・・

プロローグ（前書き）

始めまして、山田です
この小説はこのサイトに登録している『つくね』と合同で作ってます。ゲラゲラ笑いながら作ってます（笑）

プロローグ

突然ですが、俺は私立聖祥大附属中学校の生徒会会長です。ただ今二年生です

ちなみに一回死んでます。転生ってやつです、ごちそうさまです

まぁよくある転生物語だと思ってくれればそれで。チートな能力もあるので

そして今、俺は生徒会室にある。おそらく去年の生徒会会長が座っていたであろう立派な椅子に踏ん反り返りながら座ってる

「あぁ～・・・・暇だ」

いや、生徒会って意外と暇なんですね。・・・・あっ違うか、生徒会に俺しか居ないから余計に暇なのか

実は、今の生徒会は会長の俺だけです。三年生も去年、無事卒業して当日一年生だった俺が会長になったんだけど。どうやら二年生と一年生の中で生徒会に立候補したのは俺だけだったみたいで。現在生徒会人数、一人

――――　悲しみはぁ～♪

携帯の着メロがなってる。ちなみに着メロはＳｃｈｏｏｌ　Ｄａｙｓの主題歌です。たまに聞いてて鬱になります

「もしもし、なんだい飛鳥」

飛鳥と言うのは俺の友達で、山本　飛鳥　（やまもと　あすか）男です。結構な美形で、たまに誠死ねの勢いで飛鳥死ねと言いそうです

［いやさ！今、口説いてる子達が居るんだけどさ！］

知るかよ、飛鳥死ね

「で、それがどうした？飛鳥死ね」

おっとつい口にしてしまった

［酷でぇ！じゃなくて！その女の子達が相談があるって言ってきたからついに俺の魅力に惹かれたなと思いながら『ブツ！』］

おっと、俺とした事が。でもしかたないよね☆あんな自慢話しされたんじゃね☆

――――　悲しみはぁ～♪

また着メロが鳴った。しかたなく、電話に出た

「もしもし、次に自慢話しする時は人を選べ馬鹿」

飛鳥の答も聞かずに電話を切った

――――　悲しみはぁ～♪

また掛かってきた

「もしもし、だから［ごめんなさい、わかったから電話を切らないで下さい］しかたない」

心の広い俺は話しの続きを聞いてあげる事に

［女の子達の話しを聞いたんだけど、その相談事がどうも俺には解決できそうにないからお前に電話したんだよ］

「何でお前のポイント稼ぎに俺が付き合わないといけないんだよ」

ただでさえ生徒会に俺しか居ないこの孤独感的な感情でイライラしてるのに

［いいだろ？しかもその女の子達はこの学校の在校生なんだから。お前は生徒会だろ？］

だから手伝えと？でも在校生なら相談を受けない訳にはいかないな

「・・・・わかった、連れて来い」

［そい言うと思ってもう今向かってる］

そう飛鳥が言うと電話が切れた、てか切られた

「はぁ～、つか生徒会って俺しか居ないし」

と、軽く生徒会室を見渡して孤独感に包まれた

―――　コンコン

生徒会室のドアを誰かが叩いたって飛鳥しかいないか

「どうぞ」

そう言って入って来たのは飛鳥と五人の女の子達。想像してた人数より多い

「えっと、相談したいって言ってる人はこの金髪ロングのフェイト＝T＝ハオラウンさん」

飛鳥がそう紹介したのはこの五人で1番胸のある優等生（巨乳）だ

「えっと、フェイトです。失礼だけど名前聞いていいかな？」

生徒会長なのに名前を知られてない

「なら、私立聖祥大附属中学校二年。生徒会会長。青山（あおやま）　劉乃介（りゅうのすけ）劉って呼んでくれ」

プロローグ（後書き）

投稿はつくねと一緒に書いているので不定期になると思います

1話　ストーカー事件

「なら、私立聖祥大附属中学校二年。生徒会会長。青山劉乃介、劉って呼んでくれ」

つかこういうやり取りやってるとどれだけ俺の知名度が低いか身に染みるな。心にも

「はぁ？貴方が会長？・・・・・ってか生徒会ってあったの？」

もう一人の金髪が今の生徒会の現実をこうもあっさりと言われるなんて

「アリサちゃん失礼だよ、あったよ。生徒会選挙もあったし」

アリサとか言う金髪の隣にいるカチューシャを付けた人がそんな人間身溢れる発言をしてくれた

「・・・・あぁ～、あったわね。そんなの」

とことん失礼な金髪だ

「そろそろ話しを初めていいかな？」

飛鳥がそろそろ女子五人が本題を忘れてガールズトークをし始めそうなので止めに入った

「じゃあ、フェイトさんどうぞ」

「うっうん。その、最近なんだか誰かに付けられてる気がして。だから帰り道とかよく通る道とかを避けて帰ったりしてたんだけど、やっぱり誰かに付けられてるみたいで」

つまりストーキングされてると

「とりあえず防犯グッズを常に持ち歩いてください、それで大丈夫」

そう言ってまた椅子に踏ん反り返った

「それだけじゃ不安だから相談してんでしょうが！」

フェイトじゃない方の金髪が近くの机をバン！と叩きながらそう言った

「なに？ならそのストーキング野郎を退治しろと？」

「そうよ」

やだよ、普通の人がストーキングするって事はかなりフェイトの事が好きでしかたないか病んでるかの二つだぞ？ナイフとか持ってそうじゃん。俺刺されちゃう

「自分で退治とかできないの？なんかフェイトとそこのサイドポニーと短髪の人とか結構強そうじゃん」

今思い出したけど、俺が転生した場所ってリリカルなのはなんだよね、まぁ原作知らないし。主人公の名前くらいしかしんないし

「まぁレイジングハートが使えたらいいんだけど。一般人には」

「レイジングハートって？」
サイドポニーの人がレイジングハートと言った事に飛鳥が反応して
馬鹿みたいな表情をしながら聞いた
「え！なっ何でもないよ！」
いやいや、かなり怪しいだろ
「そうですか！」
・・・・・恋は盲目って聞いたけどホントなんだね
「まぁ～なんや、とりあえず警察に行ったんやけど真面目に取り合
ってくれんくて。そんな時にや・・・やま・・・山田「山本です」
山本君に会って話したらあんたが協力してくれるって聞いて」
俺の所に来たと、しかしストーキングか
「・・・まぁ暇だしやってみるか」
どうせ生徒会室に居てもやる事ないし、まして生徒会に入りたいな
んて人が来る訳ないし
「じゃあそろそろ下校時間だから帰ろうか」
そう言って皆で生徒会室を出た

――― 劉が生徒会室を出て2分後の生徒会室 ―――

―――コンコン

「失礼します。あの、生徒会に入りたいんですが・・・あれ？誰も居ない」

劉の知らない所でこんな事があったのはもちろん、劉は知らない

――― 帰り道 ―――

「で、いつもどのあたりで被害に遭うんだ？」

一応、今はさっき生徒会室にいたメンバー全員でフェイトの家に帰ってる。ちなみさっき皆の自己紹介が終わった

「えっと、一人で帰ってる時によく後ろから視線を感じる」

「ならいつも皆でフェイトを家まで送っていけばいいじゃん。そしたらストーカーも現れないんだろ？」

それで大丈夫じゃん、俺が来た意味ないじゃん

「いや、それがさ。確かに今日は皆で帰れてるけど皆も塾とか習い事とかあってなかなか帰れないらしいんだ」

よくそんな事を飛鳥が知ってるな・・・・・お前がストーカーか？

「とにかくストーカーを退治しないといけないんだよな・・・・・・やっぱりおびき出すとかしかないのか？」

そうなると俺がストーカーからナイフで刺される可能性が増えるからいやなんだけと

「そうなるのかな。どうやっておびき出す？」

どうって・・・・・どうしよう

「何か案ない？バニングス」

困った時のバニングス

「そのまえに、何で私だけ名前じゃないのよ！フェイトは普通にフェイトって言ってるのに！」

「何で？なんとなくお前とは距離を置いて接した方がいいと思って」

怖いから、お前

「・・・・・・いつか・・・・フフ」

俺はケンカを売ってはならない人に売ってしまったのか！！

「あの～・・・アリサ様？」

声が震える

「あら、いいのによ？無理！して名前で呼ばなくて」

キャラが変わっていらっしゃるだと！？

「ホントにごめんなさい・・・・・・とにかくストーカー件を何とかしましょう」

多分、此処で負けたらバニングスに一生勝てない気がしたけど。とりあえずストーカーを何とかしましょう

「ん～、そのストーカーの人はフェイトちゃんが好きでそんな事をしてるんだよね？」

なのはが何か思いついたようです

「なら、誰かフェイトちゃんの彼氏の役をして。ストーカーをおびき出したらいいんじゃないの？」

いや、そんな事してストーカー現れてみ？さぁ！此処で問題です！大好きなフェイトに彼氏ができました。ストーカーはどうするでしょうか。

1　あきらめてストーカーをやめる

2　逆上してフェイトの彼氏を殺す

3　死ねリア充

最初の選択式以外は全部死にますね。わかります

「はいはい！！その役は絶対に！俺がやる！」

飛鳥（馬鹿）が挙手してる。死ぬぞ☆

「・・・アカン、飛鳥やと絶対に彼氏に見えへん。てか想像できへん」

そこはリアリティーを求めるんだ

「何で！？いいじゃん！俺そういったの大得意なのに！」

・・・・ウザイ

「アカン、飛鳥めっちゃチャライもんウザイもん」

どうやらはやてとは思考が似ているらしい

「そうなると・・・・・」

ん？

「・・・・やな」

ん？ん？

「・・・・頼めるか、劉」

はやてが俺の肩にポンッっと手を置きながらそう言った

「やだよ！ストーカーの相手なんて絶対にブスリな展開が待ってんだろ！！」

この歳でもう死ぬとかやだよ、俺

「まぁ、ええやん」

なにが『まぁ、ええやん』だよ！

「頼めないかな？劉」

フェイトまで、つか1番危ないのお前だぞ？

「・・・・・生徒会会長たるもの、生徒の要望に答えなくてはならない」

前の生徒会会長に教わった格言。こんな格言を残しやがって

そんな事があり、明日からフェイトと帰る事に

――――　翌日の放課後　――――

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

いや、ね？今はストーカーをおびき出す為に二人で帰ってるんだけど。俺もフェイトも積極的に喋る方じゃないから気まずいのなんのって

「・・・・・あの、フェイト」

「え！？あっ何？」

明らかにフェイトは何か他の事を考えてたよね。

「いや、一応っさ。今は俺はお前の彼氏な訳だろ？だからこ～・・・・楽しく会話とかした方がいいのかな～って」

今のままじゃ倦怠期向かえたカップルにも見えないよ

「うん、私もそれ考えてた。・・・・」

「だよな、話さないと・・・・・・」

・・・・・会話が、なかなか続かない。というか今のを会話と言うカテゴリーに入れていいのかすらわからない

「・・・・フェイト・・・・・・ご趣味は？」

自分ながらに話しのネタが貧しいな（泣）

「趣味か・・・・ちょっと待って！今考えるから・・・・」

「あっうん・・・・」

まぁいきなり趣味は？って聞かれたら困るもんな

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

スタートに戻る？スゴロクなの？次は一回休むか

「・・・・ごめん、思いつかない」

だろうね

「・・・・・昨日さ、俺と飛鳥でご飯を食いに行ったんだよ」

もう、俺から話題を降るしかなくなってしまった。

――― Ｓｉｄｅ　フェイト　―――

どっどうしよう、男の子と二人っきりで帰った事なんてないし

「・・・・・・・」

「（劉もさっきから黙ったまんまだし）」

ちょっと気まずいかな。でもやっぱり劉は今は私の彼氏なんだから

楽しく喋ったりしない「あの、フェイト？」あっ！

「え！？あっ何？」

いきなりだったからびっくりしちゃった

「いや、一応っさ。今は俺はお前の彼氏な訳だろ？だからこ～・・・・楽しく会話とかした方がいいのかな～って」

よかった、劉も同じ事を考えてくれてたんだ

「うん、私もそれ考えてた。・・・・」

「だよな、話さないと・・・・・・」

・・・・とは言っても。何話したらいいんだろ

「・・・・フェイト・・・・・・ご趣味は？」

よかった話しをふってくれた

「趣味か・・・・ちょっと待って！今考えるから・・・・」

「あっうん・・・・」

早く考えないと！え～っと、趣味、趣味・・・・魔法です！って地球でそんな事言ったらヘンな子だよ。どうしようそれい以外ってなると・・・・・駄目だ、全部言えない

「・・・・ごめん、思いつかない」

はぁ～。私、駄目だな

「・・・・・昨日さ、俺と飛鳥でご飯を食いに行ったんだよ」

その後劉が何か言ってたけどあまり覚えない

――― Ｓｉｄｅ　黒い人（コナン君でお馴染みのアレ）　―――

「・・・・・・チッ！」

黒い人は劉達を見て、そう舌打ちするとどこかに行った

――― 翌日の放課後　―――

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

もうやだ（泣）昨日も途中で自分が何言ってるのかわかんなくなったし

「・・・・ごめんな、つまんなくて」

素直にそう思う

「いや！そんな事ないよ、私の方こそ」

フェイトも何だか落ち込んじゃったし

「（多分、俺とフェイトは付き合ってもすぐに破局だろうな）」

次に生まれる時はユーモアのある、アメリカンジョークをかませるくらいの人物になろう。そえ来世に願いを込めた

まぁ、こんな事言っても今はユーモアもアメリカンジョークも言えないクソ野郎なんだよな

「・・・・劉って何で生徒会会長になったの？」

おっ、会話が成立する予感

「まぁ～、何となく？」

実際そうだし

「何となくで生徒会に入ったの？」

「うん、中学に入ってからは何かおもしろい事をしようと小学生の頃から考えてて。そしたら生徒会を募集してるって聞いたから何となく入ってみた。みたいな？」

あの頃の俺は若かった。そしてその成れの果てが生徒会人数、一人と言う残念で面白くない展開に

「みたいなって、でも何だかいいね」

そう言ってフェイトが俺と喋ってて初めて笑ってくれた

「（よし！とりあえず、何とか会話が成立した）」

そう思っているといつの間にか余り人気のない場所に来ていた。別に意識的に人気のない場所に来たわけじゃないよ！

「何だか人気のないところに来たけど帰り道は合ってるのか？」

「うん、此処ってこの時間帯はあんまり人が来ないから」

だからって、人一人も見当たらないなんて。何か今から悪役が出ますって言ってるみたいで何だか不気味だ「おい貴様！」ん？

いきなり俺達の前に金髪でイケメンな人が現れた。イケメン何て死ねばいい

「えっと、イケメン君が何かご用で？」

「お前は“俺の“フェイトとよく仲良くしてるじゃないか」

俺のって、フェイトは物じゃないっての

「あの、フェイトさん？あのイケメン君とはお知り合いで？」

「いや、知り合いと言うか、前にあの人が私に告白してきてくれたんだけど。私はあの人の事を余り知らないから断ったんだけど」

つまりあのイケメンがフェイトに告白したけどフラれたと、なら俺のっておかしくない？

「それ以来、よく話しかけてきてきたんだけど。その、迷惑って訳じゃないんだけどぉ～・・・まぁそんな時にアリサが『あんた迷惑なのよ！今後一切！フェイトに近付かないで！』って言ったきり会ってなかったんだけど」

イケメン君って以外にねちっこいんだね

「そうだ！あの女が居たから俺がフェイトと話せなくなったんだ！今もフェイトと楽しく話せていたら、お前なんかよりも楽しく話せる自信があるんだ！そしたらフェイトは俺の物だったんだ！」

あぁ～！人が気にしてる事を！そうですよ！俺はフェイトと楽しく話しなんかできないよ、悪いか！（泣）

「フェイトさんよ、ちなみにアイツとの会話は楽しかった？」

「えっと～・・・・私は劉と話してる方が楽しかったかな？」

フハハハ！何処が楽しく話すだ！俺と比べられて俺が勝つなんてよっぽどだぞ！！・・・・・・あれ、なんだろ？この頬を伝うしょっぱい水は

「くっ！とにかく！お前はフェイトの何なんだ！」

あっイケメンも少し目が赤い

「え！？かっ彼氏？だよ」

で、いいんだよな？

「彼氏？お前が？ありえない、別に俺程のイケメンでもないお前が？」

確かにお前みたいにイケメンじゃないよ！そうですよ！？普通ですよ！？

「劉、大丈夫？これ、ハンカチ。あと大丈夫だよ、劉はカッコイイから」

相手の罵倒で涙が出てるのかフェイトの慰めの言葉が嬉しくて涙が出てるのかわからない。とりあえずハンカチありがとう

「フェイト！そんな奴の所に居ないで俺の所に来い！！俺が頼んでいるんだぞ！」

完璧に俺様主義ですね、クソくらえだ

「フェイトはアイツの所に行きたい？お前が行きたいんなら止めないけど」

フェイトがアイツを拒んだら一発だけおもいっきり殴ってやる

「・・・・私は、行きたくない」

よし、殴る

「・・・・・そうか、しかたない。なら力ずくで」

今から殴りに行こうと思って一歩前に出たらイケメンがそう言ってナイフを取り出した

「！？・・・・予感的中」

出した足を今度は後ろに戻した

「フェイトさん、どうしましょう？」

「えっと、どうしよっか？」

逃げるって言っても此処って障害になるような物もあまりないし、人気がない分。何かが動けばすぐにわかるし

「フェイト、お前が俺の物になるんなら。大人しく今日は帰ってやるよ、拒むのならお前とその彼氏に少し痛いめにあってもらわないとな」

イケメンがナイフを軽く降りながらそう言った

「・・・・・・・劉、今なのは達に連絡したから少しだけ耐えよう」

フェイトが小声でそう言った。つかどうやって！？いつなのは達に連絡したの！？魔法ですか？リリカルマジカルですか？

「で？返事は「ＮＯ！」お前に聞いてるんじゃないんだよ！」

「わかりきった事を言ってんじゃねぇよ、お前みたいなナルシスト野郎なんかフェイトは嫌なんだよ」

・・・・・・あっ、どうしよ。なんかノリであんな事言ったけど・・・・・・どうしよ、イケメンが怒ってる

「あぁ～わかった、お前はとりあえず死ね」

そう言ってイケメンが歩きながらこっちに向かって来た。ナイフも来た

「（来るよ！イケメンが来るよ！どうすればいい、フェイトに助けを・・・・待てよ、俺は何だ？男だろ！これくらいの自体を修習できなくてどうする！）」

どうしていいのかわからないのでその場に立ち尽くす俺

そんな事を思っているとイケメンがもう２ｍくらいの距離まで来ていた

「（くっ！バルディッシュを・・・）」

フェイトが自分の鞄についてる黄色い三角形の物を握りしめてる。お守りか？

そしてイケメンがもう１ｍの距離に・・・・・・って、え？

「・・・・・マジで？」

イケメンが俺との距離が１mになった時にいきなり走り出して俺のお腹にナイフをブスリ。※可愛い表現をしてますが実際はもっとグロいです

「劉！！バルディッシュ！」

フェイトがいきなりそう叫ぶと魔法少女のごとく変身してイケメンを蹴った

「っ痛てぇ！！クソ野郎がって何だこれ！」

イケメンがフェイトの蹴りで転がった後、イケメンの身体に光るドーナツみたいな物が巻き付いていた、そのせいで動けないみたいだ。何だかあの光るドーナツってゴテンクスのギャラクティカドーナツみたいだ

「劉！大丈夫！？」

フェイトがいまだに立ち尽くしている俺の元に来た

「ん？あぁ～、痛い」

言葉にできないこの痛み

「フェイトちゃん大丈夫！って劉君！」

なのはとはやてと・・・・・なんだか知らない人が3人と犬が一匹

「シャマル！見てあげて！早く！」

フェイトが慌ててる、俺も慌てた方がいいのか？

「・・・えい☆」

お腹に刺さってるナイフを抜きました☆だって痛いんだもん、その代わり血がドバドバと・・・・・あんまり出てないや

「え？あっ・・・・・・何で？」

これには皆もびっくりしてるみたいだ、まぁ普通はドバドバと血が出るもんね

此処で一つ、俺は転生した事はご存知ですよね？まぁ転生する時に神が何か能力くれるって言うから三つほどいただきました。その三つの中の能力で

『めちゃくちゃ傷とかそう言うのが回復する』

って能力をいただきました。まさかこんな事に役立つとは

「・・・・まぁ生きてます」

その後、警察にイケメンを突き出して。ストーカー事件は終了した

――――　翌日の生徒会室　――――

「フハハハ、頑張っている頑張っている」

冷房が効いている生徒会室で昼練をしている部活メンバーを見ながら飲むのコーヒーは格段に美味い！

―――　コンコン

誰かお客さんのようだ

「どうぞぉ！」

入って来たのは女の子5人、まぁこの前の奴らだ

「うわ！涼しい！何で生徒会室がこんなに涼しいのよ、一人しか居ないのに」

アリサさんは此処に喧嘩を売りに来たんですか？（怒）

「何か用事でも？」

「うん、あの劉。昨日はホントにありがとう。それとごめん、ナイフで刺されるなんて想像してなくて」

そう言って少し落ち込みながら謝ってきた

「あのさ、感謝するのか謝罪するのかどっちかにしろよ。謙遜していいのかお前を慰めなきゃいけないのかわかんないから。こういう時はありがとうって言えばいいんだよ」

「・・・・うん、ありがとう」

今すっげーいい事言わなかった？俺

「じゃあ御礼も済んだ事やし！ご飯にしよか」

そうはやてが言ったら俺以外の皆が生徒会室にある机に各々のパンやらお弁当やらをだして食べ始めた

「え？待って待って、何で当たり前みたいに飯食ってるの？」

「その、此処って涼しいし教室と違って静かだから。駄目かな？」

なのはの上目使い攻撃により劉のＨＰは０になった

「・・・・好きなだけどうぞ」

劉は静かな生徒会室を失った

2話　着うた

皆さん、生徒会室が賑やかです。まぁそれ自体は嬉しいのですが

「うそぉ！ホンマに？」

「ホントにホントだって！」

ガールズトークだよ。俺は生徒会会長なのに、その昨日まで座ってた会長専用の椅子もアリサに奪われ。今は部屋の隅でパイプ椅子に座る毎日

「なんだよ、何で俺が邪魔者扱いされないといけないんだよ」

コーヒーを小さくなりながら飲む毎日、フェイトなんて助けなきゃよかった

「劉、これクッキー。持って来たから一緒に食べよ？」

前言撤回！やっぱり助けてかった！生徒会室は残念な結果になったけど

「あっそや、劉！あんたに依頼や」

待って

「依頼ってなんだよ、俺は生徒会会長なの？探偵じゃないんだよ！」

「で、依頼者なんやけど」

聞いちゃいない！

「今から呼んでくるわ」

そう言ってはやてがどこかに行った

「・・・・・なのは、何で皆は此処に居るの？何で俺を敬ってくれないの？（泣）」

「えぇ～、いい子いい子」

なのはに頭を撫でられました

「連れて来たで！」

はやてが小さい女の子を連れて帰って来た

「・・・・・フェイト！警察に電話！「違うわい！」じゃあなんだよ！」

だってはやてが連れて来た女の子何だか疲れた表情してるもん

「いや、この子。ヴィータって言うんやけどヴィータがちょっと困った事があるから劉に相談しようって事になったんよ」

いやいや、その娘どうみてもうちの学校の生徒じゃないだろ。生徒会が相談事務所としてしか機能してないのもどうかと思うけど

「・・・・わかった、じゃあ話し聞くだけな？」

俺って甘いな

とりあえずアリサに必死でお願いして何とか椅子を奪還して椅子に座って

「それじゃあ、どうぞ」

相談開始

「・・・あぁ～っと。時間がある時は、はやてが学校から帰る時間には学校に迎えに来るんだけどさ」

言葉遣いがなっとらん！これだから近頃の若者は。俺も若者だった

「はやてが校門の所に来るまで待ったりしなきゃいけねぇんだよ。で、その時によく他の生徒に見られるんだよ。その視線が不愉快なんだよ！お前この学校の生徒の中で1番偉いんだろ！何とかしろ！」

小学3年生みたいな子に掴み掛かられてる俺って

「あと確かに偉いけど！でも俺アリサに自分の椅子奪われて何も言えないような人なの！」

アリサマジで怖いぞこの野郎

「まぁまぁ、とにかく劉。なんとかそのロリコン共をなんとかしてや」

もはやヴィータを見ている奴らはロリコンと認定されてしまったよ

うだ

「まぁ、話しを聞け。いいか？ロリコンの９５％はロリを眺めるだけで満足するんだよ、いいじゃん？それくらいなら。女の子が花を見て『かぁわぁいぃいぃ～』って言うのと同じだよ」

ヴィータも俺の言葉に何か感じる物があるのか少し考え始めた

「・・・・わかった、少しくらいなら我慢する」

よかった、わかってくれて

「じゃあ今日は放課後までこの生徒会室にいるといいよ。今は昼休みだから時間は掛かると思うけど」

そう言って椅子に踏ん反り返った時に悲劇は起こった

――――【せーのっ♪でもそんなんじゃだーめ♪もうそんなんじゃほーら♪心は進化するよもっともっと♪】（着うたです）

「「「「「・・・・・・・」」」」」

皆が凄い冷たい視線でみてくる、撫子が好きで悪いか

「・・・・お前は９５％の方か？残りの５％の方か？」

何処からとり出したのわからないがヴィータが機械チックなハンマーを俺に向けている。衣装も変わってる

「待て待て待て！！誤解だ！俺は断じてロリコンなどではない！！」

そしてまた

―――【せーのっ♪でもそんなんじゃだーめ♪もうそんなんじゃほーら♪心は進化するよもっともっと♪】

また着うたが流れた、つか誰だよ二回も電話する奴！！

「ちょっとだけ待って！はい！もしもし！」

電話掛けてきた奴に文句言ってやる

［あっ！劉？今すっげー情報聞いたんだけどさ！今この学校にエターナルロリータの称号を持つとされる女の子が学校居るんだって！見に行かな「ブチ！」］

やっぱり飛鳥だった、しかもロリコンだった

「死ねぇぇぇ！！」

ヴィータがハンマーで思いっきり俺の横腹を殴った

「グハ！！！」

その勢いで壁に衝突して雑巾のように床に落ちた

「ちょ！ヴィータ！今の犯罪やで！一般人に魔法は！」

ヴィータを怒る前に他に心配する人がいるでしょう、俺とか

「ハッ！怒りに任せてやり過ぎた」

ろくな奴じゃねぇな

「劉！大丈夫？」

フェイトが俺の所まで来てそう言ってくれた

「うん、大丈夫。肋骨が何本か折れたけどすぐに治るから」

ホントに神にあの能力貰ってよかった、なかったら病院ざただよ

「あと、魔法って何？」

一応知ってるんだけどこう、何回も俺の前で変身とかされるとさすがに気になる

「え！？あぁ～・・・・・どうしよ、なのは」

「ん～、言い訳できる・・・・・訳ないか」

どうやら決まったようだ

――― ３０分後 ―――

「・・・・つまり魔法がこの世界にあって、なのは達は管理局って

所に勤めてるって事？」

もうその歳で公務員とか、どんだけ安定した仕事してんだよ。羨ましい

「こっちも聞いていいかな？何で劉はあんなに回復？が早いの？」

まぁ気になるはわな。ナイフ刺されてもすぐに治るし今も肋骨が折れても回復してるし

「ん～、根性？」

説明がしにくいし、第一にどうやって回復してるのか自分でもわかんないし

「つか今はロリコンを何とかしようって話しだろ？」

とりあえずまた自分の椅子（パイプ椅子）に戻って

「・・・・とりあえずヴィータの帰宅風景を見てみないとどう対処していいのかわかんないから、ヴィータはいつもみたいに校門に居て」

――― 放課後 ―――

今は、皆でヴィータが待っている校門に来たんだけど

「なんじゃありゃ」

ヴィータを中心に半径１０ｍくらいの円になって男達がヴィータを眺めている

「・・・・この学校にどれだけのロリコンが居たのかよ～くわかった」

悲しいよ俺は

「ん？あ！劉ぅ～！お前もエターナルロリータを見に来たのか！？」

此処にもロリコン（飛鳥）が。抹殺しないと

「目！！！」

秘技“目潰し“

「目がぁぁ！！目がぁぁぁ！！」

ムスカ（飛鳥）が地面に転がってる。いい気味だ

「しかし、これを何とかって。４０人以上の人がいるぞ」

この男達を何とか・・・・・・・あっそだ

「はやて、いい事思いついたんだけど」

「ん？なんかコレを何とかする方法があるんか？」

はやてが男達を指差しながらそう言った

「うん、こんなに人が集まっててこんな混雑してるのはリーダーが居ないからこんなに混雑してるんだよ。だからいっそヴィータファンクラブでも作らしてそのうえでちゃんとその部長にこいつらを指揮って貰えばいいんだよ」

俺って頭いいね

「そんな簡単にクラブが出来るんか？顧問だって必要やし」

「大丈夫だよ、ヴィータの回りの男達の中に先生居るからそいつに頼めば」

と言うとはやてはヴィータの回りの男達の中にホントに先生が居る事を知ってリアルに引いていた

「・・・でも生徒会の許可も・・・・・劉って生徒会会長だったね」

何をいまさら言ってるのかしら、フェイトさんは

「まぁ、これにて事件解決！みたいな？」

その後、こいつらにヴィータファンクラブの話しをしたら喜んで引き受けてくれた。もちろん先生も

でも俺が『明日までに部長を決めて部活申請用紙を提出しろよ』と言ったら。

「じゃあ俺が部長だな」

「待てよゴラ、俺はお前よりヴィータちゃんを愛してるんだよ。だから俺が部長だろ」

「お前らこそ何言ってんの？俺は此処に居る誰よりもヴィータちゃんの生写真もってんだよ。俺が部長だ」

そんな会話が所々で始まった

「はぁ？生写真？馬鹿だろお前。ヴィータちゃんの可愛さは写真には写らない美しさがあるんだよ！」

「リンダリンダの歌詞パクって言ってる時点でお前にはヴィータちゃんの事はわかってないんだよ！！それに比べて俺は何でもないような事が幸せだったと思うような毎日を捨ててでもヴィータちゃんに会いたいくらい大好きなんだよ！」

「お前こそ！ロードの歌詞パクってんじゃねぇかよ！！！」

これ以上は付き合いきれなくなったので俺は家に帰った。ちなみにロードの歌詞をパクった奴は飛鳥です

――――　翌日の生徒会室　――――

「はい、じゃあコレで『愛しいのヴィータを愛でる会』は設立を許可します。これから規律のある行動をしてください」

何とか部長は決まったようでよかった。飛鳥は部長になれなかったみたいだ

「はぁ～、なんか久しぶりに生徒会の仕事した」

まともな仕事じゃないけど

「お疲れ様、お茶が熱いから気をつけてね」

フェイトがお茶を入れてくれるなんて。でも何でそんな簡単にお茶が入れられたの？お茶の場所って俺まだ教えてないのに

「劉！あんたにまた依頼や」

はやて、今昨日の件が終わった所なんだぞ？

「入って来て」

俺は何も言ってないのに

そして生徒会室のドアを開けて入って来たのは胸！・・・・じゃなくてポニーテールの人だった

「シグナムって言うんやけどな？シグナムもたまにヴィータと一緒に迎えに来てくれるんやけど」

「みなまで言うな、つまりそのシグナムがヴィータと同じように見られて困っていると」

まぁ、見てる物は違うけど

「あぁ、あの連中を主はやてがお前なら何とかしてくれると聞いてな」

武士みたいな人だな。ちょっとタイプなのは内緒で

「まぁあれですよ、皆がシグナムを見るのはシグナムのおっ・・・・・お美しいから見ているので余り非難されなさんな」

「今シグナムのおっぱいって言ようとしてたよね？」

フェイトの視線が痛いよ

「・・・まぁそんな訳だから！貴女は余り気にしない方がいいですよ」

俺の言葉に何か感じる物があるのかシグナムは少し考えて

「そうだな、少しくらいの視線くらい気にしない方がいいよな」

シグナムが何とか考えてくれたみたいだ。そこでまた悲劇が

―――【チッチッチッチ♪おっぱい♪ぼいんぼい～ん♪
チッチッチッチ♪おっぱい♪ぼいんぼい～ん♪もげもげもげ♪】（
着うた変えました）

「「「「・・・・・・」」」」

皆の視線が。ガッシュベルよく見てたからその歌にしたのに

そんな事を思いながらいつまでこの負の連鎖が続くのか恐怖を覚えた

3話　翠屋

どうも、今は部屋の隅で自分の椅子（パイプ椅子）に座りながら本を読んでます。気分は長門です

―――　ペラ

また本のページをめくった

「・・・・劉？その本、面白い？」

フェイトが俺の顔を除きながらそう言った。てかそんな事言われたら

「・・・・ユニーク」

この言葉が言いたくてしかたなくなるじゃん！

「へ～、どんなのか見せて？」

なんと！？そいつはイケないな。今読んでる本って『君が主で執事は俺で』の小説だから挿絵がエロい

「・・・・わたしの言葉が真実であるという保証も、どこにもないから」

とりあえず長門の名言でフェイトには見ちゃだめだと伝えてみた

「ん？まぁとにかく見せて？」

駄目だ！フェイトが本気で興味を持ち出した！！

――――【ミ・ミ・ミラクル☆ミクルンルン☆ミ・ミ・ミラクル☆ミクルンルン☆】

ナイス着うた！！

「もしもし！何だ飛鳥か」

電話に出る為に携帯電話を取り出した勢いで読んでいた小説を窓の外にフライヤウェイ！！

［おう！今さ、素晴らしい喫茶店を見つけたんだけどさ！！］

いちいちテンションが高い。がその素晴らしい喫茶店が気になる

「素晴らしい喫茶店って？」

［翠屋って所なんだけどさ、そこの店員が可愛いんだよ！］

あぁ～わかる、喫茶店の店員とかって無条件に可愛く見えるよな

「そうか、行くは」

［まだ何も行ってないけど？］

「どうせ行こうぜとか言うつもりだったんだろ？じゃあ今日の放課後に生徒会室に来い」

そう言って電話を切った

「ふぅ～、しかし飛鳥が賞賛する店員ってどんな人なんだろう「劉？」ん？なんだフェイト」

フェイトが一冊の本を持ちながら・・・・・あれ？なんだろ、あの本どこかでみたことあるぞ

「その／／／エッチな本は・・・・学校では見ない方がいいんじゃないかな？／／／」

見たんだね？その本を。確かに窓から捨てたのに、あっわざわざ拾ってきてくれたんだ（泣）

――――　放課後　――――

「・・・・・・・・・」

「なぁ劉、何で泣いてるんだ？しかも無言で」

だって、フェイトが本を返してくれたはいいけど。それから目が合う度にフェイトが目を反らすんだもん。真っ赤になって

「まぁ何でもいいけど、つか翠屋に着いたぞ」

もう着いたのか

「・・・・・じゃあ入るか」

翠屋に入った

「いらっしゃいませ！って劉君！と・・・・・・や・・山田「山本飛鳥です」山本君」

出て来たのなのはだった

「まぁなのは可愛いよ？でも俺ここ最近ずっと見てるんだけど」

「かっ可愛いって／／／」

はい、そこ可愛いって言われた事に反応しない！

「いや、そうじゃなくて・・・・まぁなのはちゃんに会えたしいっか。なのはちゃん！席に案内して！」

「うん、じゃあ。あちらに」

そう言って案内された席には

「・・・ナンデアナタタチガ？」

いつものメンバーがそこに居た

「此処はなのはのお父さんが経営してる店だからたまに来るのよ。デザートも美味しいし」

あぁ～、だからなのはが働いてたのか

「まぁいいじゃん！あの、はやてさん。隣いいですか？」

「ん？ええよ」

駄目だ、飛鳥が腑抜けになってしまっている

「・・・りゅ、劉も座る？／／」

まだエロ本の事を根に持っているんですね

「お言葉に甘えて」

俺もこの光景になれてきちゃった

―――　Ｓｉｄｅ　なのは　―――

まさか劉君が来るなんてビックリしちゃった

「なのは誰？あの男の子達？」

お母さんが質問してきた

「うん、最近知り合ったんだ」

「最近知り合ったにしては仲良くし過ぎじゃないか？」

っ！！ビックリした、急に後ろからお兄ちゃんが喋りかけてきたんだもん

「そうよねぇ～、最近知り合ったにしたら仲良すぎじゃない？」

なんだろ、今日のお母さんは何だか意地悪な気がする

「・・・・好きなの？あの二人のどっちか」

ホントに今日のお母さんはどうしたんだろう

「もぉ、そんなのじゃないよ！お母さんも早く厨房の仕事してよ」

―――　Ｓｉｄｅ　恭也　―――

「もぉ、そんなのじゃないよ！お母さんも早く厨房の仕事してよ」

そう言うとなのはは自分の仕事に戻った

「・・・・アイツら」

あのガキ共、俺のなのはに手を出してただで済むと思うなよ

「恭也！駄目だよ、あの男の子達にちょっかい出しちゃ。ホントにただなのはと仲良くしてるだけかも知れないでしょ？」

ありえない！なのははあんなに可愛いんだ！なのに手を出さないなんておかしい！

「大丈夫だよ母さん。少し“お話し“するだけだから」

待ってろよガキ共

――― Side 劉 ―――

「あの、フェイトさん？今日見た事は忘れましょう。それがお互いの為にも」

だってフェイトさっきから俺と目が合う度にエロ本の事を思い出すのか赤くなるもん！もうこっちが恥ずかしよ！

「うっうん、そうだよね。男の子だもんね？興味が合って普通なんだよね？／／／」

それは俺に言い聞かせてるんだよね？自分の中でそうだって言い聞かせてるんじゃないよね！？

「とにかくアレは忘れよ「おいお前」え？俺ですか？」

いきなりイケメンな人が俺達の前に現れた。何だかなのはに似てる

「そうだ、お前とそこのお前だ」

どうやら俺と飛鳥をご指名のようだ

「はっはい、あの～俺って何か貴方様を不愉快にさせるような事をしましたでしょうか？」

飛鳥がめちゃくちゃビビってる

「不愉快、そうだな。強いて言うならお前達の存在が不愉快かな？」

ん？なんだ、この人はさっきから俺達に喧嘩を売ってるのか

「あの、さっきから何なんですか？俺達が貴方に何かした覚えはないんですけど」

チンピラか何かか？俺は通信空手3級を持つ友達がいるんだぞ。負ける訳がない

「うちの可愛いなのはに手を出したんだ。覚悟しろよ。ついて来い」

行ったろやないかぁ！！

「待って劉、何で俺も連れて行くの？ねぇ！！」

一人で行くなんて嫌すぐる

とにかくチンピラについて行く事に

――― 道場 ―――

翠屋のすぐ近くの道場みたいな場所に連れて来られた。ちなみにいつもの女の子5人も来てる

「ホラ、これを使え」

そう言って俺と飛鳥に木刀を一本ずつ投げ渡してきた

「・・・・飛鳥、どうする？なんか本格的にタイマン張るみたいな感じになってきてるんだけど」

「つかさっき聞いた話だとあの人、高町恭也って言ってなのはちゃんのお兄さんらしいぞ」

マジかよ、もぉ～、そう言う大切な事は前持って言ってよ。この前のイケメンが残念な結果になったから今回のイケメンも残念な人かな？っと思ったらなのはのお兄さんかよ

「しかもお兄さんって剣道？って言うのかしらないけどそれで師範クラスの人らしぞ」

師範かよ、やべぇよ

「じゃんけんでお前が負けたらお前がなのはのお兄さんと勝負な？」

「じゃあ劉が負けたら「さ～いしょはグ！」え？え？あっジャンケンポン！」

勝負は

劉

グー

飛鳥

パー

「よし勝った！「もう一回な？ジャンケンポン！」え？ポン！」

劉

チョキ

飛鳥

パー

「よし勝った！じゃあ飛鳥よろしく」

そう言ってなのは達が居る即席観客席みたいな場所に行こうとしたら

「待てよ！何で！？俺一回勝ったよね！？なのにもう一回して俺が負けて即勝負かよ！？」
「うるさいなぁ、お約束だろうが。とにかく行って来い」
ダチョウ倶楽部だってそのくらい言わなくてもわかるよ
「うぅ～、あぁ！やってやるよ！！」
飛鳥がお兄さんに渡された木刀を握りしめながらお兄さんに向かって行った
「お兄さぁぁぁん！妹さんを僕にくださぁぁぁぁぁぁぁい！！！」
飛鳥は木刀を掲げながらなのはのお兄さんにそう言いながら向かって行った
「・・・お前は馬鹿か？」
お兄さんは向かってくる飛鳥にお兄さんが持っている木刀を大きく振りかぶって。飛鳥のお腹を殴った
「ゴフッ！！」
飛鳥がお腹を殴られた勢いで俺居る所まで転がって来た。床に寝そべっているので表情こそ見えないが多分、生きた人の顔をしていないのだろうと思う
「・・・・・・・・」

「・・・・・ただいま」

今は屍と化した親友にそう静かに告げた

「おい！次はお前だ」

お兄さんが木刀をこっちに向けながら中二臭い事を言った

「（どうしよう、嫌だよ俺？こんな屍になるの何て）」

床に寝そべっている飛鳥を見てそう思った

「・・・・・あぁ！よし！行ってやんよ！！」

飛鳥どうように木刀を掲げながらお兄さんに向かった

「うら～ら～ら～！！グフ！！」

お兄さんが俺のお腹を木刀で刺した。まぁ木刀だから刺さってないけどクソ痛い

「フッこれに懲りたらもうなのはに「待てやゴラ」ん？」

確かに木刀で刺されたよ？でも

「もう痛くないんですけど！」

自分でもビックリだよ、まさか最初こそクソ痛かったけどすぐに痛く無くなったんだもん。さすがめちゃくちゃ回復するだけはあるね

「・・・ある程度の力で殴ったつもりだったんだが・・・まぁいい、次はそこに転がってる友達と同じようにしてやる」

そう言ってお兄さんが初めて木刀を構えた

「行くぞ？」

お兄さんがそう言ってからいきなり俺の目の前に現れて飛鳥同様に俺の腹を木刀で殴った。しかもさっきの攻撃より痛い

「っ痛ぁ！！・・・・・治った、よかった」

多少、飛鳥のように転がったけど飛鳥みたいに屍になる事なく。すぐに立ち上がる事ができた

「ゾンビか、お前は」

まぁ確かにやられてもすぐに復活してたらゾンビにみたいだよな

「まぁお兄さん、も俺の回復力がわかったのなら今日はもうやめましょ・・・ッ！！！」

今日はもうやめにしょうと言おうとしたら頭を思いっきり殴られた。木刀じゃなくてグーで、グーだよ？グー

「なら、お前が『負けた』と言うまでやる」

小学生か！！！

「負けまし「そんなの関係ない！勝までやる！！」っ痛って！！だ

から負けたって言ったじゃん！！」

またグーで殴った！馬鹿なの？なのはのお兄さんは馬鹿なの！？

「もういい！俺帰る！ＰＴＡに言い付けてやるぅ！！」

俺は飛鳥を置いて道場から逃げ出した

――――　よくじつのせいとかいしつ（小学生風）――――

「あぁ～、頭痛い。お腹痛い。飛鳥が痛い」

「俺と言う存在が痛いと言う事ですか？（泣）」

たく、昨日はろくでもない日だったよ

「つか何で、まぁなのは達はこの際いいよ。何で飛鳥まで居るんだよ」

何当たり前みたいに俺の隣でパイプ椅子に座ってんだよ。まぁ俺もパイプ椅子だけど（泣）

「その、さ／／言いにくいんだけど。はやてさん居るだろ？」

居るよ、今も目の前で女の子達とゲラゲラ笑ってるよ

「・・・・可愛いじゃん？／／／」

知らねぇよ。いや、可愛いけど

「だから？」

「その・・・・できればこう・・・彼氏彼女の関係になれればなぁ～と／／」

・・・・・・・・

「なれば？つかそんなやましい理由で生徒会室を利用するのはおやめください」

つかお前って顔はイケメンなんだから捜せばあんな人の生徒会室を占領するような女達はやめとけって

「頼む！協力してくれ！何故か最近の俺って三枚目の役ばっかりだったからどうも上手くいく自信がないんだよ！」

やべっ、それって俺のせい？俺が三枚目の役にしちゃったせい？

「まぁ、考えとくよ」

自信が無くなったのって半分は俺のせいだし

「劉君！今、電話があったんだけど」

何でなのはが電話した事で俺が出てくるんだよ

「お父さんが昨日の事をお兄ちゃんに聞いて。お父さんが会いたいだって」

俺は絶対に会いたくない！！って言っておいて！！

それからしばらくは翠屋の近くを歩けなかった

4話　合コン

突然ですが、今の生徒会室には。いつものように女5人がガールズトークをしている訳でもなく。男二人、部屋の隅でパイプ椅子に座りながら本を読んでいる訳でもなく

「続いての議案何ですが」

いろいろな委員会が集まって、体育祭に向けての会議が開かれています

「（つかこれだけの人が居て、しかもそのトップに立つ生徒会の人数が一人って）」

なかなかに孤独を感じるな

「聞いていますか？生徒会会長さん」

名前は知らないけど風紀委員の子が注意してきた

「聞いていたと言えば嘘になる。でも聞いてなかったと言えば真実になる」

「結局聞いてないんじゃないですか」

だってつまんないんだもぉ～ん

しかしこの生徒会室にあの女5人組が居ないと言う当たり前の空間に違和感を覚えてしまうなんて。以外と俺って淋しがり屋？

「生徒会会長さん！聞いていますか！？」

「聞いていたと言えば嘘にな「わかりました。聞いてなかったんですね？」まぁね」

さすがにみんなが呆れてきた

「失礼ついでにもう一つ、何の話してたの？」

だって聞いてないからわかる訳ないじゃん。俺は聖徳太子じゃないんだよ。聖徳太子の楽しい木造建築なんか出来ないんだよ馬鹿野郎

「・・・・今はもう大部分の話が終わりました。これがさっき話した内容です」

と言って風紀委員の人が会議で決まった事を紙に書いてまとめたやつを俺にくれた

「・・・・・君はアレか？いま流行りのツンデ「違います。話を戻してもいいですか？」どうぞ」

「で！体育祭の時に生徒会にしてほしい事は、選手宣誓と体育祭で使用する小道具等をその当日にしていただきます」

ん？なんかおかしくない？

「それじゃあまるで俺は当日まで何もしなくていいみたいじゃん」

「そうです、生徒会は人数が一人。しかもやる気がない。そうなれ

ばもうこんな事くらいしか頼める事がなくて」

さらっと酷い事言うな

「・・・・まぁわかった。じゃあこれにて解散！」

これにて会議は終了し、委員会のみんなは帰って行った

「ふぅ～、しかし当日まで何もしなくていいのか」

そんな事を言われたら逆に何かしたくなるじゃないか。つか体育祭まで一週間と二日あるのにその間何をしろと？

――――　ガチャ

急に生徒会室のドアが開いた。委員会の誰かが忘れ物でもしたか？

「やっと終わったわね、会議」

入って来たのは委員会でもなく先生でもなく一日校長のアイドルでもなく、いつものメンバーだった

「何で当たり前みたいに生徒会室に入ってくるかな？一応、立入禁止なんだよ？関係者以外」

「何言ってんね。いまさら」

・・・・そうだね、今さらって感じだね

「つか早くそこをどきなさいよ」

アリサが当たり前のように代々生徒会会長が座ってきた由緒ある椅子に当たり前のように座った。俺を退かして

「・・・・ヒッグ・・・グス」

なっ泣いてなんかないんだからね！！・・・・・・まぁお約束もやった所でいつものパイプ椅子を出して椅子に座った。ちなみに飛鳥は知らないうちにパイプ椅子を出して本を読んでいた

「・・・・なぁ飛鳥。暇じゃね？」

「うん、だって目の前に女の子達が居ても部屋の隅でエロ本を読むくらいしかないくらいに暇だ」

あっ、その本ってエロ本だったんだ。どうりで真剣に読んでるはずだ

「・・・・ちょっと見せろよ」

エロ本に興味があるお年頃なので

「これ見てみ？やばくね？」

「おぉ～、くれは何とも」

生徒会室の隅で男二人がエロ本を読むって

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

何か喋ろうよ。俺達

「劉。山本君。何読んでるの？」

また貴方ですかフェイトさん

「体育祭の資料だよ」

ある意味、この本（エロ本）の中では体育祭が開始してるよ？ブルマだけど

「そう言えばもうすぐ体育祭だね。見せてくれないかな？」

フラグか？フラグなのか？

――【負けないで♪もうすこし。　最後まで走りぬけて♪どんなに離れてても♪】

また着うたが鳴った！

俺は電話に出るためにポケットに入った携帯電話を取る為に立ち上がり、その立ち上がる瞬間に飛鳥が持っているエロ本を奪い。フェイトに背中を向けた瞬間にエロ本を服の中にしまい。電話に出た

「もしもし！あっ何だ生徒Ａか」

電話から出たのは生徒Ａだった

［いやさ、お前って明日の放課後空いてるか？］

何だい何だい急に

「ん～まぁ、体育祭前日までは暇・・・ってフェイトさん！貴女なにしてるの！？」

フェイトが俺の体をペタペタと触りだした。まさかエロ本が、ばれたかのか！いや、俺の隠蔽工作がバレる訳が・・・・ハッ！まさか飛鳥か！！

飛鳥を見てみると口パクでゴメンと言っている。腹立つ

「ちょっ！フェイトさん！やめて、変な興奮を覚えちゃう！」

しかし無言でペタペタと俺の体を触りまくる

「フェイトちゃん何してるの？」

フェイトの奇妙な動きにさすがに残りの女の子達が驚いてなのはが代表して聞いた

「劉がエッチな本を体のどこかに隠してるんだって。見つけて処分とお話ししなきゃ」

そんな事で真剣にならないでください！！まぁ絶対に、というか女の子では絶対に見つけられない。見つけても触れない場所に隠したから安心だがな！

「・・・ダメだ、上半身全部探したけど見つからない・・・・・しかたない、バルディッシュ！ハーケインセイ「待って！わかった！

出すから攻撃しないで！！」わかったよ」

つかしかたないからってバルディッシュ出して攻撃しないでください

「・・・・どうぞ、お受け取り・・・したくないよね。燃やします」

どうぞ、お受け取りっと言いながらエロ本を渡そうとしたら女の子皆が首を思いっき横に振ったのでその場で燃やした。

※読み終わったエロ本は燃えるゴミに出してください。

[劉？劉！何かそっちであったのか？」

あっ、そう言えば電話したままだったっけ

「あっごめん、ちょっと今説教されて「劉？今は電話切ろうか？」すぐに終わるから待って！」

だからバルディッシュをしまって！！

[じゃあ言うけどさ、実は明日に合コンを企画してるんだけど集まりが悪いんだよ。だから劉に来てほしいんだ]

ごっ合コン・・・合コン。なんて素敵な響きなんだ

「行く、つか行く、てか行く、ぜってぇ行く！！

俺は返事も聞かずぬ電話を切った

「よっしゃ！フェイト説教は明日・・・じゃなくて明後日にして！

飛鳥！服買いに行くぞ！」

飛鳥を連れて生徒会室を出た

――――　翌日の放課後　――――

「で！生徒Ａ君よ、合コンはどこで模様されるのかな？」

今の俺の服は昨日飛鳥と服を見に行き買った服だ。でもそのせいでメリットが

「そうだぜ生徒Ａよ！早く合コンの場所を言っちゃいなよ！」

飛鳥まで来てしまった。まぁ元々飛鳥は誘う予定だったらしいけど。ちなみにメンバーは俺と飛鳥と生徒Ａの三人

「お前ら知ってるかな。翠屋って所なんだけどさ」

！？！？！？！？！

「え？マジで？えぇ～・・・・マジで？」

この前そこで酷い目に会ったばかりだよ。飛鳥なんて両肩を抱きながら震えてるもん

「・・・・いや、頑張るんだ飛鳥！俺は出来る子飛鳥！行くぞ劉！」

飛鳥が震えながらも自分の目的の為に立ち上がった。男だぜ、飛鳥

「じゃあ行くか」

――――　翠屋前　――――

よく思ったら翠屋の中にアイツら（なのは達）居るんじゃね？生徒会室もカギ掛けてきちゃったし。もしくは相手がアイツらだったりして・・・・しゃれにならんぞ

「おい！生徒Ａ」

生徒Ａを呼び止めた

「ちなみに相手ってうちの学校の人か？」

「いや、公立の中学の子」

よし！大丈夫だ

「じゃあ入ろうか！」

翠屋のドアを開いた

「えぇ～・・・・よし！居ない！」

翠屋に入ってすぐに席を見て、アイツらが居ない事を確認した

「いらっしゃいませ劉。今日はどうしたの？」

「ん？何だフェイトか。実は今から合コンするんだ・・・よ・・・・・」

・・・・・そんなのアリかよ、まかさ店員なんて

「ごうこん？何？それ」

よかった知らないみたいだ

「えっと、知らない女の子と・・・・じゃなくて！年に一度！親戚の女の子と楽しく喋ったりする事だよ！！」

つか何で俺は言い訳してるんだろう？

「へ～、地球にはそんな文化があるんだ」

よかった。この子が地球の子じゃなくてよかった！

「あっ！生徒A君！こっちこっち！」

どうやらあの窓際の席に座って居る女の子達が合コンの相手みたいだ。結構可愛い

「おう！じゃあ劉、飛鳥、行くぞ」

そう生徒Ａが言って、俺達は気合いを入れて女の子達の元に行った

――― Ｓｉｄｅ フェイト ―――

「おう！じゃあ劉、飛鳥、行くぞ」

そう知らない男の子が言って劉達は親戚だと思うけど。女の子達の所に行った

「・・・行きたいけど、年に一度って劉が言ってたから迷惑だよね」

とりあえず皆が居る厨房に

「お帰りフェイトちゃん。ごめんね？お母さんもお父さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも用事で来れないからって手伝いさせて」

何でも今日はなのはの家族全員が用事で翠屋に来れないから私達が翠屋の仕事を手伝っています

「それは別にいいよ。なのはの家族も親戚の女の子と楽しく喋りに行ったんでしょ？年に一度しかないんだもんね。大切にしなきゃ」

年に一度しかそんな事がないなんて、そんな行事ならもっとすればいいのに

「え？何その怪しい行事は？」

あれ？私がそう言うと皆が『何それ？』みたいな顔をした

「だって、さっき劉が来て。今日はごうこんって言う日らしくて。年に一度、親戚の女の子と楽しく喋ったりする日だって劉が」

「・・・・あぁ～フェイトちゃん？あんた劉に騙されとるで？」

はやてがそう言った

「え！？ホントに？」

「そうよ、ホントの合コンって言うのは。知らない男女が楽しくお茶する事を言うの。」

そうなんだ、でも何でそんな事に嘘ついたんだろ？

「でもそんな事が私に嘘つくような事か「甘いでフェイトちゃん！」え！？なっ何で？」

はやてが急に大声を出して私にそう言った

「合コンって言うのはそこで楽しく話した相手と彼氏彼女の関係になったり！、しかも今では結婚している大半の人の出会いが合コンと言う結果まで出ている程に合コンって言うのは侮れんやつなんや」

・・・・・つまり今、劉達が話してる女の子の中でもしかしたら劉の彼女になる人が居るかもしれないって事か・・・

「何だかやだ」

よくわかんないけど・・・・・・やだ

「劉のやつ、フェイトに嘘つくなんていい度胸してるわね・・・・邪魔してやる」

アリサが凄くいい笑顔でそう言った

「ちょ！さすがにアカンやろ？」

「はやては言いの！？今見たけど山本も居たよ？はやてこの前山本に告白されてたのにいいの！？」

え！？いつの間にそんな事が

「いや、でも断ったし。飛鳥はなんか趣味ちゃうねん」

・・・・そんなシレッっと言わなくても

「とにかく！暇だから邪魔・・・じゃなくてフェイトに嘘を言った罪は合コンを邪魔して返してもらうわよ！」

何だかやる気が起きないなぁ～

―――　Ｓｉｄｅ　劉乃介　―――

「アハハ！！やべっ超楽しい」

まぁ最初こそギクシャクしたけど今ではもう凄い盛り上がってる

「つか飛鳥っていつはやてに告白したの？」

なんかこの前、『俺、はやてさんに告白したんだけど・・・・フラれた・・・ハハっ笑いたかったら笑え『アハハハハハハｗｗｗ馬鹿だｗｗフラれてやんのｗｗ』ごめん、やっぱり笑わないでください（泣）』って飛鳥が言ってきたからあの日は腹筋崩壊するまで飛鳥の前で笑ってたから訳をまだ聞けてなかった

「え！？飛鳥君ってフラれたの！？信じらんない」

合コンで知り合った女の子の一人がそう言った

「今思い出す事かよ、えっと確かお前に俺がはやてさんが好きだって報告してから三日後に告白したんだけど・・・・・はやてさんが『その、あんたの事をあんまり知らんから。ごめん』って言われた。まだちょっと引きずってる・・」

そらそうだ。まだ出会って一ヶ月くらいしかたってないもん

「でも大丈夫だよ！俺はこのフラれた女の子にまだ未練たらたらの男と違って好きな子居ないし！いや、むしろ君達がす「劉君！！」

き・・・へ？」

いきなりアリサが現れて、しかも俺の事を『劉君』なんて言ってきた

「劉君、何で合コンなんかしてるの？私との事は遊びだったの！？」

お嬢様だから？演技力がハンパない。これが英才教育ってやつか

「待てアリサ、俺とお前にはそんな昼ドラみたいな関係はないはず

「うるさい！うるさい！うるさい！」頬っぺたぁぁ！！」

アリサが急に俺の襟を掴むと、俺を地面に叩き付けて。アリサが俺の上に乗り。『うるさい！』と言う数だけビンタされた

「劉君が浮気をした、うるさい！した事はホント、うるさい！ホントじゃ、うるさい！じゃない。うるさい！」

アリサの家ではうるさいと言う度に人にビンタをする決まりがあるのかと思うくらいにビンタされる

「ありふさん、ほんほにやめてくだふぁい」

どうしてだ、めちゃくちゃ回復するはずなのに頬っぺたの痛みが消えない。これがギャグ補正と言うやつですか

「・・・・・もう知らない！！・・・・・・うるさい！！！！」

もう知らないで翠屋のドアまで行ったけど、何かを思ってか戻ってきて今までで最高のビンタをされて翠屋を出て行った

「・・・・・・・・・・」

「・・・劉？大丈夫？」

大丈夫に見えますか？頬っぺたがアンパンマンみたいに膨れあがっているのに

「あっあの！わっわた・・私達帰ります！！」

女の子達がアリサを見てか若干涙目になりながら翠屋を出て行った

「・・・劉、飛鳥、大丈夫・・・・か？」

今俺達は泣いていた、泣きたい訳じゃないのに。泣いていた

「いやぁ～、アリサちゃんはなかなかエグイ事するな」

悪魔（なのは達）がやって来た

「その、劉が悪いんだよ。私に嘘なんてつくから」

フェイトさんよ、確かに嘘をついた事は謝ろう。だけどこれはひど過ぎる！！合コンだよ！？女の子との出会いだよ！それを潰された男の気持ちがお前にわかるのか！！しかも今日の為に服を買ったんだよ！５万だよ！？

「・・・フェイト、嘘付いてごめん」

「・・・・うん、いいよ」

「あと・・・・・・フェイトなんて大っ嫌い！！！！」

目から大粒の涙を流しながら翠屋を出た

5話　仲直り（前書き）

関係ないですが
作者は水樹奈々の大ファンです！奈々様バンザイ！！

5話　仲直り

―――　Ｓｉｄｅ　フェイト　―――

「・・・・・・・・」

「あの、フェイトちゃん？ホントに大丈夫？」

どうも、今はいつものように生徒会室には行かない・・・・と言うか・・・劉が生徒会室を開けてくれないから入れなくて。今は私の教室に皆で集まってます

「・・・・・はぁ」

昨日、劉に言われた『フェイトなんて大っ嫌い！！』と言う言葉が頭に残って。なかなか元気が出ません

「アリサちゃん、どうするの？アリサちゅんがあんな事をするからフェイトちゃんがあんな」

「なっ！でもなのはもちょっと乗り気だったじゃない！」

「そんなんより今はフェイトちゃんをどないするか考えなアカンやろ！」

皆、聞こえてるよ

「・・・フェ・・フェイト？げっ元気だしなさいよ？」

慰め？をありがとう。でも、元気でないや

―――　生徒会室　―――

「フェイト藁人形にぃ～、なのは藁人形にぃ～、アリサ藁人形にぃ～、はやて藁人形にぃ～、すずか藁人形にぃ～。ゴッスン☆ゴッスン☆ゴッスン☆ゴッス「はやて藁人形には手を出させねぇよ！！」・・・チッ！」

今はあの女5人に似せた藁人形にゴッスン☆ゴッスン☆してました

「・・・・あぁ～、駄目だ。クソォォォ！！女の子がぁぁぁ・・・大人の階段昇りそこねた・・クソ、やっぱりゴッスン☆ゴッスン☆しとこ」

女5人の藁人形に満遍なく釘をゴッスンしとこ

「なぁ、そろそろやめようぜ。かれこれ2時間も同じ事してんじゃん」

はぁ！？はぁぁ！？

「いいよお前は！！モテるもん！顔はいいもん！性格があれだけど。だけど俺はモテないもん！よくて“いい友達“だもん！そんな俺には藁人形にゴッスン☆ゴッスン☆するしか」

―――　ゴッスン☆ゴッスン☆

「いや、まぁ～。ごめん？（笑顔」

死ねばいいのに！

「つかフェイトちゃんかなり落ち込んでたぞ？」

知るかぁ！！こっちは・・・・・・こっちは、心に大きな傷を背負ったんだぞ？もしかしたら合コンで出会った女の子の中に赤い糸で結ばれた人が居たかもしれないのに！？

「・・・・・出てけ、飛鳥なんて出て行ってしまえ！」

「はぁ？って痛い！藁人形を投げイタい！！」

持っていた藁人形を飛鳥に投げ付けて飛鳥を生徒会室から追い出した

「・・・・・・ゴッスン☆ゴッスン☆ゴッスン☆」

藁人形をひたすら打ち続けた

―――　Ｓｉｄｅ　フェイト　―――

「やっぱり色仕掛けとかどうやろ？」

「何で劉を誘惑しなくちゃいけないのよ。いやよ」

皆が私の為に劉と仲直りしる方法を考えてくれてます

「はやてちゃぁぁぁん！劉に生徒会室を追い出された！」

急に教室のドアが勢いよく開いたと思ったら山本君が入って来てそう言った

「なんやね暑苦しい、馴れ馴れしくはやてちゃんなんて呼ばんといて」

「そんな！？（泣）」

この二人は山本君が一回告白したにも関わらず、山本君がはやてにしつこくって言い方は悪いけど、山本君がはやてに言い寄る？まぁそんな事が合って、なんだかんだで仲良くしてる

「うるさいわね、飛鳥！あんたもフェイトと劉が仲直りする方法を考えなさいよ」

「またむちゃなフリを・・・・・・色仕掛けとか「今言った所やボケ。あと変態」待ってよ、はやてちゃぁ～ん」

色仕掛けか・・・・無理だ、想像できないや

「・・・ねぇ、そう言えばもうすぐ体育祭だよね？」

そう言えば、すずかの言うとうり。体育祭まで一週間だった

「その体育祭を使って仲直りできないかなぁ～、って思って」

皆の口から『おぉ～』っという言葉が出た

「・・・・・・体育祭をどう使って仲直りするの？」

「「「「・・・・・・」」」」

フリだしに戻っちゃった

――― Side out ―――

――― 一週間後　体育祭 ―――

「宣誓！我々は。スキンシップに則り。性交を堂々とする事を。誓い「誓わないでください！！」冗談なのに」

生徒会役員共ネタですね。分かります

あっちなみに今は体育祭してます。さっそく選手宣誓にネタをしました

「選手宣誓！中略！誓います！！」

さっきの後だからだろうか、生徒の一人たりともツッコミを入れてくれない

まぁ、そんな感じで体育祭が始まった

――――　女子　５００ｍ走　――――

――――　ポヨン☆ポヨン☆

「・・・・・飛鳥さん」

「・・・・何ですか？劉さん」

「女の子が走るって、いいよね」

ホントにね、近頃の中学生の成長には目を見張る物がありますね。

こう、ポヨン☆ポヨン☆ってね

「おっフェイトが走るのか・・・・見なくては」

あの巨乳がどれだけの上下運動をするのか気になるじゃないか

「ん？なぁ、劉？お前この前までフェイトの事嫌ってなかった？」

何をいまさら

「いや、さ？一回フェイトの事を拒絶したじゃん？なのにいまさら

『やっぱりごめん』何て言えないじゃん？もうフェイトえの怨みな

んか藁人形に捨ててきたからもうないし」

意地はってフェイトに謝れないだけだよ？でも一週間も喋ってないし。もうフェイト達に会う前に戻ったと思ったらそれでいいなか？とか思ってたし

「・・・・・なんじゃそら」

飛鳥に呆れられた。腹立たしいのでその辺に生えてる雑草を抜いて。飛鳥の体操着の中に入れた

「・・・・ん？劉？何かした？」

「何も・・・・フェイトの乳・・・ハァハァ」

どうやら飛鳥は服の中に雑草が入っている事に気付いてないようだ。馬鹿め

そして俺はフェイトの乳揺れを堪能するのであった

――― 玉入れ（エロくない方だよ☆）―――

女子５００ｍ走の後に男子５００ｍ走も合ったけど無視して玉入れに参加です

「・・・・・・・・」

「・・・・よろしく、劉」

どうやらフェイトのクラスと協力してやるらしいので。フェイトにばったり会ってしまった

「（頑張って俺！もう意地なんて張らなくていいんだよ！）・・・・・・・よろし「パン！！」・・・・」

俺がフェイトに話しかけようとしたら、名前はわからないけど体育祭とかで使うピストルみたいなのが鳴って。邪魔された

「え？劉、今何か言わなかった？」

「・・・・はぁ！！？そんな事言ってないし！今は玉入れだし！」

台詞を邪魔された恥ずかしさみたいなのを隠す為にフェイトにそう言って、玉入れを真剣に真顔でやる自分が嫌いでしかたない

「そっか・・・・玉入れしないとね」

フェイトが黙々と玉を入れはじめた。テンションが低いのを5歳時にもわかるくらいの雰囲気をだしながら

「（馬鹿！俺の馬鹿ぁぁぁぁ！！）」

あれ？何でだろ、玉入れ全国8位の俺がカゴの中に玉を入れられないなんて。・・・あっ、涙で前が見えないからか

――― お昼 ―――

「飛鳥。このオニギリ、しょっぱいな」

「・・・・それはお前の涙が隠し味になってるんだよ。まぁ隠すも何も現在進行中で味付けされてるんだけどな」

あぁ～、どうりで

ちなみに今、昼ご飯を食べている場所は生徒会室です。外でシート張ってご飯もいいけど生徒会室はクーラーが効いてるから

――― ガチャ

誰かが入って・・・・・・

「お久しぶりです、アリサ様」

皆ご存知、アリサ様。と女４人

「やっぱりクーラー着いてる。あんたズルイのよ！皆が暑いなか体育祭何て事してるのに自分達は涼しい所に居て！あとそこどきなさい」

俺にあらかたの文句を言った後に生徒会会長専用の椅子を久しぶりに奪われた

「シクシク（／｜；）」

そして久しぶりにパイプ椅子に座った。もちろん飛鳥は元からパイ

プ椅子

「劉？お昼ご飯ってオニギリだけ？しかもコンビニの」

いや、いつもは母さんが弁当を作ってくれるよ？でも今日は父さんとどこかに行くと言って今日の朝には母さん達が居なかったからしかたなくコンビニのオニギリ

「その、よかったらタマゴ焼き食べる？」

そうフェイトが言いながら自分の弁当箱を俺の方に差し出して来た

「（マジか！・・・しかし俺にはフェイトのタマゴ焼きを食べる資格なんて・・・）」

でもやっぱりオニギリだけ。と言う残酷な事実がありにけり・・・・自然とフェイトの弁当箱に目が行く

「（・・・いいじゃん俺、普通にフェイトに謝ってタマゴ焼き食べれば。よし！）・・・フェイト、さっきはごめ「フェイト！そんな奴に食べさせるんなら私が食べる」・・・・」

フェイトに謝罪しようとした時にアリサが横から入って来てフェイトのタマゴ焼きを奪うと、元は俺の椅子に座りなのは達と喋りだした

「・・・あの、りゅ「ごめん！俺今から仕事あるから！！」あっうん」

用事も仕事も無いのに生徒会室を飛び出した

―――　体育祭終了　―――

「えぇ～、皆様。お疲れ様でした。え？俺は疲れてるのかって？いろいろな意味で疲れたよ」

体育祭の閉会式で生徒会会長たる俺に閉会式の挨拶をしてほしいとの事で挨拶してました

「じゃ、これで生徒会会長の挨拶を終わります。はい拍手！！」

そう言うと心の優しい数人の生徒が拍手してくれた

そして閉会式が終わり、今は競技で使った。玉とか竿とか綱とか、そういうのを倉庫に俺、一人で片付けてます。ホントは生徒会全員でやるんだけどその生徒会が俺一人だからしかたなく一人で

「・・・・なんだろ、俺ってイジメられてるの？こんな事を一人でやって」

普通こう言う事を一人でやってたら

―――　妄想　―――

俺「ふぅ～、さすがに一人じゃ疲れるな」

女の子「先輩ぁ～い！大変ですね！お手伝いします！」

女の子2「あっ、私も手伝いまぁ～す」

女の子3「生徒会会長素敵です！私もお手伝いします！」

俺「アハハハ☆じゃ、手伝ってもらおうかな？☆」

女の子1・2・3「「「はぁ～い（はぁt」」」

――― 妄想乙 ―――

「くらいの事があってもおかしくないんだけどな」

何故だ、今日の俺は。まぁエピソードこそ書いてはいないが全ての競技に置いて1位を取ってきたんだ。それくらい期待してもいいじゃないか

そう思いながら綱引きで使った綱をズルズルと引きずりながら倉庫に向かった

「・・・あっ、劉。今コーンを運び終わった所だよ」

倉庫に着くとそこにはフェイトがコーンを倉庫にしまっていた

「・・・・・何故にフェイト？」

「その、一人で大変そうだから」

フェイトしゃん

「フェイトいやフェイト様！今まで誠に申し訳ございませんでした！！」

俺は下が地面なのを関係無しに土下座した。おでこが地面に擦れて痛い

「そんなフェイト様なんていいよ！今までみたいにフェイトって呼んで。後私もごめん、劉がごうこんにあんなに気合いを入れている事もしらないで」

いいんです。どうせ続いてても飛鳥に全部取られてましたから

「それより、ね？早く片付けよ？」

貴女はどこまで天使何ですか

「うん、ソッコーで終わらせます！」

今ならゴム人間とか倒せそうです

その後はフェイトと二人で競技に使った物を片付けていきました

6話　メイドしゃん（前書き）

ただメイドさんを出したいなぁ～っと思っていたら
こんな事に　ｏｒｚ

6話　メイドしゃん

どうも、劉です

今は昼休みで生徒会室に居ます。でも生徒会室には俺しか居ません。今日は女5人組は学食でご飯が食べたいらしくて。今は俺一人

「はぁ〜・・・・コーヒーが美味しい」

昼休みに学校で流れる音楽を聞きながらコーヒーを呑む。これだ、何でないような事が幸せだったと思うって奴だね。

今の俺は常に笑顔です

「しかし、昼練してる部活連中を見てると心が豊かになるね」

俺は今、お昼のティータイムをしているぞ☆みたいな

そんな時だった急に生徒会室の窓が割れ

―――　バリィン！

女の子が窓を破って入って来た

「・・・・・・・・・」

女の子が窓を破って入って来た事と俺の優雅なティータイムがぶち壊れたと言う二つの事が起きて。俺の顔はまだ笑顔のままで固まっている

「痛いですね。貴方が青山劉乃介さんですか？」

女の子が窓の破片が刺さってて痛いのか少し涙目で俺の名前を言った

「（・・・・待って、女の子。そんな急展開は俺は認めない！つか何だこの子！）」

何だこの真っ黒なメイド服を着た女の子は！？

「あっ、はい。劉って呼んでくれれば」

頑張れ俺！まだ行けるぞ俺！

「わかりました、劉乃介さん」

乃介が入ってる

「劉乃介さん、私達の所に来てくれますか？私達のボスが貴方の回復力に興味があるんです。だからモルモットとして来てくださると嬉しいです（笑顔」

――――　キュ～ン（はぁt

やべっ！危っぶね！今ちょっとこの女の子にときめいてモルモットもいいかな？って思っちゃった

「いや、その。そんなモルモットにしてまで研究する程の物じゃないので」

「いえ、そんな謙遜を。劉乃介さんのその能力を調べる事で私達のボスは不老不死の手掛かりを掴めると踏んでいるくらいに期待されていますよ」

何？その鋼の錬金術師とかに出てきそうな研究テーマ

「謙遜してる訳じゃないんだよね」

できれば早くお引き取りしてほしいんですが

「そうですか、しかたありませんね」

そう言ってナイフを取り出した。ナイフって言ってもイケメンが持ってたおもちゃみたいな物じゃなくて本気で人を殺すようなナイフだ

「とりあえずボスには勧誘が失敗したら戻ってこい、と言われたんですが。手土産にでも腕の一本や二本、頂きたいのですが？」

そう言って可愛いく首を傾げながら近づかないでください！！

「・・・・ホイ！」

近づいてくるメイド服の女の子に、手に持っていたコーヒーカップを投げ付けた。コーヒーで目隠しになればと思ったんだけど

「・・・・酷いですね、いくら私がメイドだからと言ってコーヒーカップを投げ付けるなんて」

投げ付けたコーヒーカップを中に入っているコーヒーを零さずにキャッチした

「えぇ～、マジかよ」

まさかあんな芸当が出来るなんて

「そんな行儀の悪い子には、お仕置きですね（笑顔」

ドSさんですか。僕イジメられちゃう

「えっと、あった」

とりあえず近くにあるモップを武器にするために掴んだ。何で生徒会室にモップがあるのかって？この前アリサに『・・・汚い、掃除』と呟かれて、飛鳥と二人で生徒会室の隅の隅まで掃除させられたからだよ

「・・・・モップごときで私の進行を止められるとでも？」

そう言いながらゆっくりとこっちに向かってくる

「・・・知ってるか？京都神鳴流は武器を選ばないんだぜ？」

此処で俺が神から貰ったもう一つの能力を紹介しよう。めちゃくちゃ回復するの他に『ネギま！の京都神鳴流を使えるようにして』です。いやぁ～、なんかアレカッコイイなぁ～っと思ってノリで頼みました

―――　ザシュ

・・・・頭の中でそんな事を考えていたら。メイドさんに右片あた

りを刺されました

「・・・・・って！痛って！！メイドさん！貴女いきなりすぐる！！」

いつの間にか目の前に居たメイドさんを突き飛ばしてそう言った。ちなみにまだナイフは刺さったままだ

「劉乃介さんがモップを構えたままジットしているのが滑稽・・・失礼、隙だらけなので攻撃してしまいました。テヘ（棒読み）。あっナイフ返して貰えますか？それオダーメイドなので高いんです」

なんて身勝手なメイド！信じられない！そして素直に刺さっているナイフを抜いてメイドさんにナイフを返す俺って

「つかマジで痛い・・・・まぁ今治りましたけど。シャツが血でベトベトに」

「あっなら私が洗いますよ。メイドなので」

そうメイドさんが言ってくれた

「え？あっホントですか？ならお言葉に甘え・・・・メイドさん。シャツを脱いでる隙に刺すのは人として間違ってると思うな？」

メイドさんがシャツを洗ってくれるとの事でシャツを脱いでる最中に、メイドさんにお腹をブスリと刺されました

「すみません、私はメイドはメイドでもボスのメイドでして。劉乃介さんのメイドではございません。しかしやっかいですね、刺して

も刺しても回復するなんて」

可愛い顔してやる事エグイよ、もう少し深く刺さってたら貫通する勢いだし

「ゴフッ！ペッ・・・あの、どうか今日の所は帰ってくれません？わたすのお腹がオワタな状況になりそうなので」

「なら腕を下さい。じゃないとボスに叱られちゃうんです。シクシク（／＿；）」

顔文字がある時点でふざけてるよ。この人

「それに京都神鳴流と言うのを見てみたいんです。見せてください」

なんてわがままなメイドさんなんだろう。でも可愛い

「・・・使おうと思ったけどやめるよ。なんか使ったらいけない気がする」

メイドさんは何考えてるのかわかんないし

「なら腕を下さい。私、ボスに叱られたくないんです（ウルウル）」

そんな、上目使いで目をウルウルさせないで！ノックダウン寸前だよ！！

「・・・・えぇ～い！ダメだダメだ！！気をしっかり持つんだ俺！」

そうだ！こんな時は体育祭で揺れていたフェイトの乳を思いだして

気をしっかりと持つんだ！。フェイトの乳フェイトの乳・・・・・・・
フヒヒヒヒｗｗ↑（変態）

―――　ブシュ

案の定、刺された。

「急に黙ったと思ったらニヤけ始めたので。・・・なんとかなく」

何て酷いメイドだろうか

「つかメイドさん。これホントに痛いんですよ？そろそろ人の気持ちを考える努力をしましょう」

はなまるあげるから！

「なら・・・お前はゾンビか！？・・・いかがでしょうか？」

え？何？それが貴女が考える人の気持ちを考えた結果何ですか？

「あの、もういいですから。だからお早くお帰りください」

「いやです。腕ください。あとその片に刺さっているナイフ返してください」

効率悪いね、ナイフって。一々敵からナイフを返してもらわないといけないなんて。あっ普通の人はナイフが刺さったら死ぬからこんな事にならないのか。俺不死身（笑）

―――　ガチャ

そんな時に生徒会室のドアが開いた

「劉。紅茶入れなさ・・・・・って何よこれ！！」

アリサが生徒会室に入るなり俺に命令する事は今は置いといて。まぁびっくりするわな。生徒会室に入ったら血だらけの俺と謎のメイド・・・・謎しかないよ

「え？アリサちゃんどうした・・・・え？劉君！」

アリサの後からいつものメンバーが入って来て。今俺が置かれている状況に気付いてくれたみたいだ

「劉！大丈夫！？なんなのあの・・・・・真っ黒な服を着てる人は！？」

メイド服がわからないフェイトなのでした

「・・・さすがにこの人数は大変ですね。帰ります」

そう言ってメイドさんが窓に足をかけた所でフェイトとなのはが変身した

「時空管理局です！そのナイフをこちらに渡してください！」

フェイトがそう言うと、フェイトとなのはが自分の武器をメイドさんに向けて構えた。刃物を人に向けちゃいけませんってお母さんに習わなかったのかな？

「ん～・・・・このナイフは高いから嫌です」
メイドさんがただナイフが高いからという理由でナイフを渡す事を拒否し。窓から飛び降りた
「なっ！・・・・って意外に大丈夫そうだね。メイドさん」
メイドさん窓から飛び降りて、地面に着いた瞬間にウサイン・ボルトもビックリな早さでどこかに走って行った
「・・・・追わないの？フェイト達はその・・・・時空管理局ってやつなんだろ？」
「ホントはそうしたいんだけど。まだ校内に人がいっぱい居るから、一応私達の魔法って秘密にしないといけないから」
でもメイドさんは普通に飛び降りてしかもオリンピック選手以上の走りを見せてたよ？あっ、メイドさんが悪役だから出来たんですね。わかります
「つか劉は大丈夫なんか？見た所かなり血が服に着いてるけど」
「ん？まぁ大丈夫。３箇所刺されたもう治ってるし」
皆に見えるようにシャツを上に上げて、皆に見えるようにした
「・・・・ホンマや。治っとる」
「と言うか、もうこれはレアスキルじゃない？こんなの異常だよ」

フェイトに異常って言われた

「・・・ねぇ？劉君。一回リンディさん達に会ってもらえるかな？今回の件もあるし。その回復力についても気になるし」

えぇ～、なんか面倒臭い。よし！断ろう

「ちなみに美人やで。リンディさん」

「行きます。つか行きたい！！」

待ってろよ美人の人！！

――― 翌日（フェイト家） ―――

「・・・・・・・・・」

「よろしくね、私がリンディ・ハオラウンです」

騙された。リンディさんは確かに美人だった。でも人妻だった。フェイトのお母さんだった

「・・・あの、帰ってよろしいでしょうか？つか帰る」

「まぁまぁ、あっ私はエイミィ・リミエッタね？よろしく」

この人も美人です。でもさっき聞いた話ではフェイトの兄貴と結婚する予定だそうです。・・・・あれ？俺は此処に何を死に来たんだ？

ちなみに今この部屋に居るのは。リンディさんとエイミィさんとフェイト、なのは、はやてとロリータと爆乳と地味な人と青い犬です

「えっと劉乃介君でいいのよね？」

「あっ、劉でいいですよ？」

「あら、そう？なら劉君、って呼ばせてもらうわね？」

・・・・なんだろ、なのはに『劉君』って言われた時は何だか気恥ずかしい気分になったのに。リンディさんに『劉君』って呼ばれるのは何だか・・・・・エロい。これが人妻の魅力か！！

「ならさっそくだけど本題に入るわね？その昨日遭遇したメイド？について何かわかる事はないの？」

「そうですねぇ～（リンディさんいいにおいｗｗ）・・・・・メイドさんが毎回ボスがボスがって言ってました」

「つまりその劉君を襲った人は誰かの命令を受けて劉君を誘拐しようとしたのね」

「はい、多分。（フェイトのお母さんだからかな？胸デカイｗｗ）・・・・・ホントに恐ろしい。」

はい、真面目にやる気なんてありませんｗｗｗ

「しかし何で劉君を襲ったりしたんでしょうか」

「あっ、メイドさんのボスが何でも俺の回復の秘密を調べて不老不死になりたいらしいですよ。何処の悪役も不老不死とか世界征服とか好きですね。フ〇ーザとかフリー〇とか」

悪役で〇リーザしか浮かばない俺もどうかと思うけど

「回復？どう言う事なの？」

フェイトさんよ前以て俺の情報を言っておいてよ。説明が面倒臭いでしょ

「俺ってナイフで刺されてもすぐに回復するんですよ」

「そうなの、レアスキルかしら？」

「私はそうだと思うんだけど。調べてみないとわからないから・・・・・エイミィ。調べて」

ん？んん！？待て待て。俺は話をするだけと聞いて、リンディさんが美人と聞いて来た訳で俺を調べさせる為に来た訳ではない！！

「断固拒否させてもらう！！」

「お・ね・が・い？」

リンディにお願いされても俺は拒否させて・・・

「エイミィさん、何処に俺を調べる機械があるんですか？」

・・・・・大人の魅力に負けました

――――　小一時間後　――――

「ん～、調べた結果。劉君の回復力は別にレアスキルじゃないね」

まぁそうだろね。神様が俺にくれた能力だもの！人間が作った機械等で計れる物ではないわ！！俺にするわからないしな！！

「でもそれとは別に面白い物があったよ。まず、レアスキルが劉君にある事と。リンカーコアも少量だけどあるのと」

まだあるのか。あと『別に面白い物』って何だよエイミィさん

「それと二つくらい別の魔力みたいなのともう一つわからないエネルギー？みたいなのがあるんだ」

あ～、そう言えば神様が京都神鳴流のオプションで“気”をくれたようなくれなかったような

「劉？何か私達に隠してない？」

「あるに決まってんだろ。何で会って一ヶ月くらいしか経ってない

奴に俺の全部を教えないといけないんだよ」

どんだけ俺はお前達の事を信用してんだよ！って話だよ

「うん、そうだよね・・・・・私達まだ出会ってまだ一ヶ月だもんね？」

フェイトさんよ、あんまり落ち込まないでください。別に俺は正しいのに悪い事したみたいな空気になるじゃん

「・・・・・まぁそれは置いといて。エイミィさん。俺にレアスキルがあるとは何ですか？」

「ん？あっそうだった。劉君は・・・・・まぁレアスキルと言うか召喚魔法が使えるんだよね」

え？何それ怖い・・・・・つかかっけ～

「何？じゃあ俺はスライム・・・・・じゃなくて何かモンスターを召喚出来たりするの？」

「ん～そうかな？」

よっしゃゃゃゃ！！！

「フハハハハハ！！ならやってやんよ！いでよドラゴン！！！」

右手を天高く挙げながらそう叫んだ

「・・・・・・・・・・」

「・・・りゅ「フェイトちゃん！あんなんに話し掛けたらアカン！」
え？・・・うん」
・・・・何も起こらなかった。ただ皆から冷ややかな視線がきただけで
「・・・・エイミィさん。何も起こらないよ」
「だって劉君の魔力量って少ないから。あと劉君デバイス持ってないでしょ？」
なのは達みたいに魔法の杖を持ってないからいけないのか
「リンディさん。デバイスとやらをください」
「ん～・・・・わかりました。でもその代わり管理局に入って？」
「管理局に興味が沸いたら考えます。だからデバイスくんろ？」
「なら」
リンディさんありがとう
その日は帰った

―――　帰り道　―――

「・・・・・・メイドさん。そろそろ出てきてくんろ」

「気付かれていましたか。貴方には気付かれていない自信があったのに」

いや、確かに気付いてなかったよ？でも何か後ろが騒がしいと思って後ろを見たら帰る途中かは知らないけどおばさん達が『今のメイドと言うやつですわよね？』『ホントに近頃の若い子の考える事はわからないわぁ～』とか言ってたから『あっ、メイドさん。付けて来てるんだ』と思って

「ところで何か俺に用事で？」

いつもなら今俺が居る場所は人がよく通ったりするんだけど今は何故か人が居ない。多分メイドさんの仕業だと思う

「はい、劉乃介さんが腕をくれないからボスに怒られてしまいました。見てください、このタンコブを」

「いや、知らないから。俺は何もしてないから」

自分の腕を守っただけだから

「と、言う訳で。今回はボスにいい子いい子して貰うために私の独断で劉乃介さんの腕、並び研究に使えそうな臓器を貰いにきました」

そうメイドさんが言いながら。両手いっぱいにナイフを構えた。何処にそんなに締まってた

「はぁ～、しかたない。正当防衛です」

俺は背中から木刀を取り出した。実は昨日から背中に木刀を隠して持ってます

「劉乃介さんも本気なんですね。劉乃介さんは何が欲しいんですか？腕？足？」

どちらかと言うと貴女のメイド服が欲しいです

「レッツパァ～リィ～」

7話　お姉様

「レッツパァ～リィ～」

木刀を構えた。あと死ぬ覚悟も決まった

「私から行きますね？」

メイドが一本踏み込んだ。っと同時にナイフを三本投げてきた

「よっと、メイドさん。一方踏み込んだのなら接近するのかと思うからそんな事しないでください」

飛んできたナイフを木刀で叩き落としてメイドさんに質問タイム

「フェイクですよ。でも劉乃介さんは騙されませんでしたね。おめでとうございます」

「どうも、つかそろそろ名前を教えてもらってもよかですか？」

「あっ、そうでしたね。雨宮（あまみや）　八千（やち）です。『やち』か『あまちゃん』でよろしく」

やちと呼ぼう

「ならやちさんよ。次はこちらから行きますよ？」

とりあえず俺も一方踏み込んで

「神鳴流奥義　斬岩剣！！」

斬撃をやちに向けて放った

「もう、危ないです・・・ね！！」

しかしやちはそれを簡単に避けたと思ったらすぐにこっちに向かって来て俺にナイフで切り掛かって来た

「っ！痛って。腕カスッたぞ」

「いえいえ、今のは完璧に腕を切り落とす勢いだったのにそれをカスッただけで済む劉乃介さんは凄いですよ」

やちが切り掛かったのを何とか避けたつもりだったけどカスッた

「次はこちらをどうぞ」

そう言ってやちが俺の両片にナイフを刺した

「ア゛ァァァァァ！！っ！・・・ハァハァハァ。ッハァ。やちグロい」

人間って両片に力いっぱいでナイフを刺して抜いたら噴水みたいに血が出るんだね

「まだ死にませんか・・・・・・いっそ心臓に杭でも刺しますか？」

やちも俺の反り血を浴びて顔とかスクールデイズの言葉並に血がついてる。まぁ服は黒色だから目立たないけど

「それバンパイア。つか今のはかなり劉乃介さん嫌いだな。言っとくけど怒ってるんだよ？」

俺の真っ白なシャツを真っ赤にした罪は重い

「私はボス限定でMなので。劉乃介さんにはそんな事を期待していません。むしろいじめたい」

自分のナイフに着いた血を舐め取りながらそう言った

「・・・・じゃ、行くぞ？」

「はい、いつでもどう。っ！！？？ッグ！・・・痛い・・・女の子に出す力じゃ・・・・ハァ・・ありませんよ？」

俺はネギま！の瞬動を使ってみたら使えたので使ってやちの懐まで潜り込んだらやちのお腹を木刀で切った。まぁ木刀だから切れてないけど

「男の子の両片にナイフを刺す女の子も無いわ」

しかしあらためて思うね。やちは今、木刀で切られた時にアバラを折ったのか痛そうだけど俺は両片の傷ももう治ったし

「あぁ～痛いです。これで赤ちゃんが出来なくなったら責任を取って貰いますからね？」

「取ります！って返事してんじゃな〝い〟・・・・やぢ、の〝どに〝ナ〝イ〝ブをざざないで」

俺が話してる最中にやちに喉に向かってナイフを投げられた

「ごめんなさい。お腹が痛くてむしゃくしゃして」

この子は現代っ子代表ですか？ゆとり教育反対！！

「あ〝あ〝ああ、よし！治った。じゃあやち？お前のボスについて聞いていい「劉君！大丈夫！？」・・・・なんですかなのは達」

いまさらだけどなのは達が助けに来てくれた

「・・・・援軍ですか。根性無し」

俺が呼んだ訳ではありません

「まぁとにかく。ボスを教えて？」

「・・・・いや・・・・・・です！！」

そう言うとやちが何か丸い物を地面に投げ付けたと思ったらその丸い物から煙幕が出てきて辺り一面煙幕で包まれた

「なっ！やち！何処だ！！・・・・・・居ない」

少しして煙幕が晴れたから辺りを見回してみたけどやちはもう居なかった。メイドと言うスキルだけじゃなくてくのいちのスキルまであるのか、やちは

「はぁ～、くそ。・・・・・つか何で今頃なのは達が来るの？」

助けに来たのはフェイトの家に居たリンディさんとエイミィさんを抜いたメンバーだった

「え？あぁ～。実は・・・・」

――― 回想（フェイト家） ―――

「・・・・あれや、あの回復力がレアスキルとかやなくてただの劉の身体能力やって言うのが信じられん」

「ん～、確かにちょっと信じられないよね。ナイフでお腹を刺されてもすぐに回復するなんて。ゾンビみたい」

「なのはもはやても酷いよ。・・・！？なのは！今結界が張られた！」

「うん！行こう！」

皆がフェイト家を出て、結界が張られている場所に向かった

「劉！とあのメイドだ！」

結界が張られている場所に着いた。ちなみ全員が変身をしている

「早く行かなきゃ「待てテスタロッサ！」何シグナム！早く行かないと」

劉の元に行こうとしたフェイトをシグナムが止めた

「いや、行かなくていい。今の青山の目は覚悟を決めた男の目だ。そんな目をした男の闘いを邪魔するなんて・・・・私はできない」

「・・・・うん、わかった。劉、頑張って」

――― 回想終了 ―――

「って事があったの。ごめんね？助けられなくて」

ホントだよ、なんだよそのありがた迷惑な心使い

「・・・・まぁいいや。じゃあ俺帰るから」

そう言って皆と別れた

突然ですが。俺の家族構成を教えておこう。父さんと母さんと俺と・・・・お姉様です。家族構成はこんなもんです。え？お姉様の部分が気になるって？・・・・聞かないほうがいい

―――　自宅前　―――

「・・・・・すぅ～はぁ～・・・・よし！ただいま！！」

いつものように家に帰って来た。そしてすぐにリビングに向かった

「ただいま。・・・・・って何でまた血だらけなのよ」

これは母さん。名前は青山（あおやま）　美雪（みゆき）。またって言うのは単にこの前のストーカー事件の時め血だらけだったから

「気にすんな。とりあえずこれお願い」

血だらけのシャツを母さんに渡した

「あっ・・・・・姉さんは？」

「いつも部屋にいるじゃない」

一応、言っておくと姉さんはヒッキーです。大学生なんだけど頭いいからテストの日以外は来なくてもいいと先生に言われているらしいです。俺は普通だよ

「そうだよな・・・・じゃあ部屋に居るから」

自分の部屋は二階にある。ちなみに姉さんの部屋も二階で隣です

「・・・・・・・・・・」

物音をたてないで、自分の部屋に向かう

――――　ガチャ

何とか自分の部屋のドアを開ける事に成功した。自分の部屋にさえ入ってしまえば姉さんに会わなくてすむ

「ただいま。何？半裸で私のテリトリーに入らないでちなみに私のテリトリーは目に入る範囲全てよ」

・・・・・何故貴方がわたすのテリトリー（自分の部屋）に？

「・・・・・おかしい。此処は俺のもっともプライベートな空間なのに姉さんが。しかも俺に断りも無しにベットに寝転びながら本を読んでいる」

それも当たり前のように。しかもお菓子零れてる

「そんなくだらない事はどうでもいいのよ」

くだらなくない

「それよりコレ買って来て」

そう言ってメモを渡してきた

「・・・・・・ＢＬですね。わかります・・・・そしてコレを男の

俺に買ってこいと？」

姉さんは同性愛者とかの小説が好きなようです。姉さん自身が同性愛者と言う訳じゃないけど。レズとかＢＬとかが大好物です

「えぇ」

そんなシレッっと。

「馬鹿ですか。男の俺がＢＬなんて買ってみなさい。まず店員に『いらっしゃっ・・・・掘られるぅぅ！』的なリアクションが待ってるかもしんないだろ！！劉乃介さんそんな展開はやだ！」

「もしくは『いらっしゃっ・・・少年。俺と　や　ら　な　い　か？』な展開があるかもしれないじゃない。あら楽しい」

楽しくないよ！！

「とにかくやだ「ヒャダルコ！！」くば！！」

そうなのです。俺の姉さんは何故かドラクエの魔法を使えるんです。俺は使えませ。意味がわからない

「次は火だるまにして欲しい？それともザ「行ってきます！！！」キ・・・いってらっしゃい」

これが俺の人生で１番の敵だ。やちなんて目じゃないぜ。あっ、まだ姉の名前が出てなかったですね。青山（あおやま）　氷華（ひょうか）・・・名前からして悪役だな

「・・・・・はぁ。買いに行くか・・タイトルは・・・・『愛とケツと漢女(おとめ)』と『いさじと　や　ら　な　い　か』・・・ハハッ、まともな物が無いや」

涙を出しながら。近くの書店に

―――　ウィーン

自動ドアが開いた

「いらっしゃいませ。少年・・・・・俺と　や　ら　な　い　か？」

店に入った瞬間にいさじの服着たナイスガイが居た

「（・・・・マジかよ。なんだ、俺はこのいさじ姿の男の前でＢＬを買わないといけないのか。つかどんだけ今日はついてないんだよ。メイドから始まりいさじに終わるか？）」

俺の貞操のピーンチ

「・・・・・・やっぱりやだ」

とりあえず他の店に行く事に

――― 一時間後 ―――

あれから数件探したけど。・・・・・・目当てのＢＬがなかった

――― ギーコ ギーコ

ブランコに乗りながらいさじの前でＢＬを買わなくてすむ方法を考えてるけど

「・・・わかんない、わかんないよ・・・・俺の貞操を守る方法が見つからないよ（・―・、）」

――― ギーコ ギーコ

とにかく今はブランコを楽しもう

――― ギーコ ギーコ ギーコ ギーコ ギーコ ギーコ ギー

「劉？」ん？

フェイトが買い物袋下げてるフェイトが来た

「・・・・はっ！フェイト来て！！」

「へ？って何？」

フェイトの手を引きながらいさじ書店（仮名）に向かった

――― ウィーン

「いらっしゃいませ。少年、俺と　や　ら　な・・・・・なんだ、女連れか」

フハハハハハ！！攻略したぞ！いさじを攻略したぞ！！！

「あの、劉？何がしたいの？」

「ん？あっいや、・・・・・・一緒に本を買いに行きたくて？」

「え！？／／／（つっつまり・・・・デートって事？／／）」

「（いさじが怖くてフェイトに着いてきてもらったなんて。男として言えない）」

いろいろな思いが交差していた

「え～っと、あったあった」

目当てのＢＬ本をゲットした

「何？それ」

「ん？気にしなで。それよりフェイト」

俺はフェイトの両手を握った

「え？なっなに？／／」

「・・・・コレ、買ってきて」

そう言ってＢＬ本を渡した

「・・・・・・・あっ、うん。・・・・・任せて」

なんだろ？凄くテンションが下がってらっしゃる

とにかくフェイトにＢＬ本を買ってきてもらって帰ってもらいました

――――　自宅　部屋　――――

「お姉様ぁぁぁぁ！！買ってきますた！褒めて！そしてその豊満な胸でわたすパフパフして「ギラ」ギャァァァァァ！！！」

自分の部屋に入るなり『ギラ』を唱えられた

「うるさい。あと遅すぎるわよ。早く渡して」

何て人間身の無い姉なのだろうか。ちょっといさじから開放されてハイテンションになっただけなのに

「どうぞ、渡したので早く自分の部屋に戻って」

「えぇ、そろそろこの部屋のイカ臭い匂いに嫌気がさしてきた所よ。我慢の限界」

そう言ってＢＬを俺から奪うと自分の部屋に戻った

「・・・・クンクン・・・そんなにするかな？・・・・ファブ〇ーズしとこ」

ひそかに傷ついていた事は言うまでもない

8話　魔法のカギ

起きなさい、起きるのよ

ん？

「誰だよ・・・・・・！！？？・・・何ですか、此処は」

目が覚めるとＢＬＥＡＣＨの一護の精神世界みたいな場所だった。

やばい、俺今はビルの真横で寝てるｗｗ

「起きましたね」

「ん？何あん・・・・・・ミクぅぅぅぅ！！！？」

横には初音ミクがいました

「違います。私は貴方の斬魄と・・・木刀です」

今あきらかに斬魄刀って言いましたよね！？でも俺は木刀なんて

「前回の話で使ったでしょう、木刀を。アレです」

「なら何でその木刀がミクになってるの？」

なんか目の前でミクが動いてる事に違和感を。あっ次いでに『裏表ラバーズ』歌ってくれないかな？あの歌好きなんだよ

「・・・・・ＢＬＥＡＣＨで一護が次の力を手に入れる為にもう一

人の自分と闘ったりしたでしょう？アレです」

そんな銀〇みたいな事しなくても。あとさっきから『アレです』って何だよ。口癖？

「貴方はまだ弱い？です。だから私・・・・・ミクが出てきたんです」

名前が思いつかなかったんですね。わかります

「それではさっそく出て来てもらいましょう。来てください」

そして出て来たのは・・・・・・俺だった

「どもｗｗｗわたす劉ですｗｗｗｗｗ」

性格は俺より酷いみたいだけど

「で？ｗｗｗさっそく勝負するか？俺ｗｗｗｗｗ」

「・・・・しかたない、ミクにカッコイイ所でも見せて俺の事をマスターと言わせてやる」

そして俺達二人は構えた・・・・・・・

Ｗｉｉリ〇コンを

「・・・・待ちなさい二人とも。なんでＷｉ〇リモコンを持つの？」

「何でって勝負って言ったらマ〇パーだよな？」

「マリパ〇だろｗｗｗだって痛いのやだもんｗｗｗ」

とりあえず近くのビルの中に入って。Ｗ〇ｉを起動させて。マリパ〇をやるぜ

――――　３０分後　――――

「ハァハァハァ、俺ばっかりを虐めるからだ」

そこには血だらけのミクと俺２だった

何でこんな事になったのかって？俺は忘れてたよ。マ〇パーはゲームの中で１番喧嘩をしやすくなる物だった事を。おかげでミクまで被害に

「よ、よくぞ内なる自分を倒した」
まぁかなり予想外の結果に終わったけど
「さぁ、起きるのだ。そして起きた時には劉乃介の新の武器があるはずだ」
とりあえずその指示に従って。瞼を閉じた

「はっ！」
目が覚めたらベットの中だった
「やっぱり夢だった「ドサッ」ん？」
ベットから何かが落ちた
「（まさかベットから落ちた何かが俺の新しい武器か！）」
期待に胸を膨らませて、ベットの下を見た

「・・・・・・何で・・・・・・・・ネギ？」

ベットの下にはネギが落ちていた

「・・・・ミクだから？ミクだから？・・・・・・いくら俺でもネギでやちは倒せないぜ」

とりあえず冷蔵庫に入れておこう

俺は冷蔵庫に入れる為にリビングに向かった

「ん？クンクン、みそ汁の匂い」

そう言えばもう朝か

「あらおはよう。今日は早いのね」

母さんがみそ汁作ってました

「ホントね、槍でもふるんじゃない？むしろ降らせてあげましょうか？」

俺は姉さんが母さんと一緒にみそ汁作ってる事にビックリだよ

「つか何で姉さん起きてるの？いつもなら寝てる時間なのに」

俺の姉はニート

「昨日貴方に買ってきて貰ったＢＬの中で男といさじが二人でみそ汁を作るシーンが気にいったから私も作ってるの」

よくそれでみそ汁を飲もうと思ったな。いさじと男が二人っきりでみそ汁を・・・・・・やだ、みそ汁飲みたくない

「ん？あら劉。あなたいい物を持ってるじゃない」

姉さんが俺の右手にあるネギを指差しながら言った

「あぁ～・・・・・何でネギなんて持ってるんだろ？」

「まぁとにかく渡しなさい」

とりあえずネギを渡した。なんだか大事なネギだったような気がするが

「私千切りが好き。最初は完璧な一本のネギが惨めにも人間の手によって木っ端みじんにされるのだから」

そう言いながら木っ端みじんにされていくネギ・・・・・・ん？あれ、なんだろ？頭の中でミクボイスの人が『助け！木っ端みじんにされる！！』って叫んでる気がする

「・・・・気のせいだな」

教区その１。人は夢を忘れやすい　ｂｙ作者

―――　生徒会室　―――

「え～じゃあ、彼氏と上手く行く事を祈ります」

「はい！ありがとうございました！」

女子生徒Ａが生徒会室を去って行った。実は何故かはやてやフェイトを助けた事が噂になり。生徒会室にはあのように相談して来る人が来ます。ちなみにさっきの相談内容は彼氏が最近冷たいだそうです

「はぁ～・・・・・怠い」

マジ怠い。何で俺が他人の恋愛相談まで受けなきゃならんのだ

「つか俺は彼女が居る訳でもないのに相談受けて馬鹿じゃね？彼女欲しい」

せつに思う

「・・・・はやて」

「ん？なんや」

「女の子紹介してください」

そう言うとフェイトが飲んでいたコーヒーをアリサに向かって吹い

た。ばっちい

「・・・・何でうちなん？」

「いや、この女の子の中で1番女友達が多そうなのってはやてぽいから」

「だから、何でうちが劉の為に大事な女友達を犠牲にせなあかんねん」

だって！

「彼女欲しい」

そう言うと皆があたかも今俺が喋った事をなかった事にしようとするかのように喋り始めた

「・・・・・なんだよ！いいじゃんか！彼女が欲しくて何が悪い！！」

中二舐めんなコノヤロウ。中二病が起こりはじめる時だぞコノヤロウ

「・・・・・・うっさい」

「・・・・・・・ヒッグ・・・・エッグ・・うぅ～「腹立つからやめなさい」・・・・」

此処に俺の居場所はない

―――　帰り道（公園）　―――

「・・・・・・・帰りたくない。と言うか学校にも行きたくない」

そう思いながらブランコに乗りながらギーコギーコしてます

「・・・あっそうだ。誰も俺を知らない場所で暮らそう・・・・アハハ・・・・・」

―――　ギーコギーコ

「・・・・ところでさっきから俺の隣でギーコギーコしてる貴女は誰ですか？」

何故かさっきから俺の事を付けてきて、しまいには一緒にブランコでギーコギーコしてます

「・・・・・・・・・・」

どうしよ、無視だよ。あっ服はメイド服です、灰色の・・・・・・・・なんだ？メイド服流行ってるの？

「・・・・・・・じゃあとりあえず俺、滑り台行くから」

そう言ってブランコから降りて滑り台に向かおうとしたら

「・・・・・・・・・・」

付いてきました

「・・・・・わぁ～」

滑り台を手を挙げながら滑り台を滑った

「・・・・・わぁ～・・・・」

無口な子もつられてか手を挙げながら滑り台を滑った

「・・・・（楽しくない、まぁ中二が楽しめるような物じゃないのはわかるけど。それでも今この二人で滑り台するより楽しいと思う）・・・・わぁ～」

とりあえずもう一度滑り台を滑る

「・・・・・・はぁ・・わぁ～」

呆れられた!?実はしかたなく付き合ってた!?・・・・・・・つかなら一緒に滑るなよ

「あの、わたすぅ帰りますから「ガシ！」ん？」

肩を掴まれた。しかもかなり力強い。肩に爪がえぐりこんでるよ

「・・・・青山劉乃介？」

いやな予感

「わたすはピッコロともうす者でござる。けして青山劉乃介などと言う人物ではないでやんす」

さとられないように、ころころとキャラを変えてきた

「大丈夫あってる・・・ふざけた事をする奴は・・・青山劉乃介と聞いている」

ちくそう、裏目にでてしまった

「・・・・ちなみに誰に俺の事を聞いた？」

「・・・・・・やち」

・・・・・いや、薄々てか最初っから気付いてたよ？でも認めたくないのだよ、若さゆえの過ちを

「とにかく・・・・・腕もらう」

と言った瞬間に掴んでいる手に力を入れたのか、万力機に挟まれてるのかってくらいの力で右肩を掴まれた

「痛ったぁぁぁぁぁぁあ！いんじゃボケ！！」

痛いので女の子には悪いが女の子を蹴飛ばした

「っ！・・・最低、女の子殴る奴はボスがクソ以下だって言ってた」
あぁ！わたすは確かにクソ以下かもしれない！ワンピースのサンジなら蹴らないだろうね！でも女の子が肩を握り潰そうとしちゃいけない！！
「・・・・ちなみに名前は？」
「・・・・私は対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース・・」
長門！！？？
「って言えばやちが『それだけ言えば劉乃介さんな腕をくれるはずです♪頑張って』・・・・って」
やちさぁぁぁぁん！！貴女はこんな何も知らない子にこんな事を言わせて楽しいですか！？
「（・・・・しかし困った、今回はやちの時みたいに木刀を持ってきていな・・・・あれ？木刀？・・・・何か引っ掛かるぞ）」
なんだろ、木刀と言った途端に何か忘れていた何かが・・・・・・・・あっ
「（・・・・・ミクさぁん。居ますか？）」
頭の中でそう言ってみた
【・・・・居ますが？（怒）それが何か？（爆）】

居たよ、お腹の辺りで声が聞こえるよ。やっぱりあのネギは貴女(ミク)だったんですね

「（・・・・・・ぶ・・・・武器が必要なのですが？）」

【あるじゃないですか、まずは喉に手を入れて大腸あたりまで伸ばせばあるんじゃないですか？武器(ネギ)が？（怒）】

それはウ〇コなんじゃないかな？あっ消化しちゃったと。まぁ朝に呑んだからね

「（ごめんなさい。何でも致します！だからわたくしめに武器を！！）」

【・・・・・わかりました。今回だけです】

そうミクが言うと背中にベチョリとした長う物が現れた

「・・・・ミクさん、とりあえず武器をありがとうでも・・・・まぁネギなのは許そう！だけどなんでネギの汁みたいなのがこんなに出てるの！？あっ、やば涙だ出て」

【単なる嫌がらせです】

この子は性格が悪いな・・・・調教するぞ

「・・・・・それで・・・・戦う？」

いつの間にか手にハンマー・・・・初代ガンダムが持ってるような物

を持ちながらそう言った

「あぁ、ズッ！ごめ゛ん。鼻水が」

畜生！何で悲しくもないのに涙がでるんだよ！

「・・・・じゃあ、行く」

そう言いながらこっちにハンマーを投げてきた

「ック！しゃんなろぉぉ！！」

飛んできたハンマーをネギで叩き落とす事に

―――　ビュン

―――　グニュ

「グバッ！！！」

ハンマーにネギはクリンヒットしたけどネギが柔らかすぎてハンマーがそのままの勢いで俺に突っ込んできて。俺は飛ばされた

「っつぅ～。ミクさんや、ネギが柔らかのだが？」

【嫌がらせです】

馬鹿ですか？今の嫌がらせは生死が掛かってたぞ！

【っと言うのは嘘です。ネギなんだから柔らかいのは当たり前です。

気とか使って硬くしてください】

それ退化してない！？木刀のままのほうが強いじゃん！

【あっ、あと気を入れすぎるとネギ汁が垂れてきますから】

先に言えよ！おかげで手がネギ汁まみれ！！痒い

「マイナスしかないよ、このネギ」

まぁ、そんな事を灰色のメイド服の子は無視して。俺の目の前まで来てハンマーを使って殴りつけてきた

「ガッ！！何かの骨折れた「うるさい」なっ！！」

話してる最中に灰色メイドがハンマーでボクサー並にストレートかましてくる。何発も。どうやらハンマーには掴みやすいように細工がしてあるみたいだ

「グァ！オェ！はぁはぁ・・・はぁ。少しは会話しようよ？・・・会話大切。人類サイコーのコミュニケーションだよ」

「・・・・・なら、腕」

会話したくば腕寄越せって事か？

「・・・・・しゃぁない。やるか」

ネギに気を込めて。ネギ汁は気になるが気にせずにメイドに向かってネギを構えた

「あっ、まだ名前聞いて・・・・聞いたけど答えてもらってないよね？」

「・・・・・長門って皆言う。名前は無い」

あれ？実はさっきのホント？つか名前無いって・・・・・まぁ気にしないでおこう

「なら長門・・・・・・ごめんね？」

俺はネギをその場でおもいっきり振った

「っ！！・・・・・・・・居ない」

俺は長門にネギ汁を飛ばして。その隙に逃げた。ごめんなさい、無口キャラ大好きなんです。そんな俺が長門と言う名のメイドに攻撃できる訳がない

――――　自宅　――――

「ハァハァハァハァ。疲れた、久しぶりに全力疾走した」

とりあえず部屋に向かった。

――――　ガチャ

「ただいま。さっそくだけどコンビニまで行ってファミチキ買ってきて」

あれ？此処は俺の部屋だよな？鍵はちゃんと掛けたはずなのに

「カギはこれよ」

そう言いながら何かのカギを俺に見せてきた

「グビ〇ナ城３Ｆの宝箱の中に入ってたの、魔法のカギ」

姉さんがいつの間にかドラクエの勇者になっていた

「・・・・だからって開けるなよ」

それでもファミチキを買いに行く俺が居た。ギガント怖い

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9652n/

生徒会少年リリカル劉ぅ！只今、青春をお楽しみ中

2010年10月14日11時09分発行